ロリとテストと召喚獣

橘天龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ロリとテストと召喚獣

【Ｎコード】
Ｎ９１４１Ｐ

【作者名】
橘天龍

【あらすじ】
唐突だが、皆さんは”性転換”というのはご存知だろうか。
男が女に、女が男に…つまり性別を反転させることなのだが…

オリジナルキャラ紹介（前書き）

他の作品が頓挫してる状態での投稿ですみませんι

この作品はＥエブリスタに投稿したのを加筆・修正した作品です。

オリジナルキャラ紹介

名前：柏木勇（かしわぎ　ゆう）

性別：男

イメージＣＶ：福〇潤

学年：文月学園一年生（もうすぐ二年）

身長：坂本雄二より少し低い

容姿：黒髪短髪で顔はそこそこいいほう（女顔ではない）。中肉中背でよくも悪くも平均的、つまり特徴がない。

備考：本作の主人公だが…名前：柏木ユナ（かしわぎ　ゆな）

性別：女

イメージＣＶ：丹〇桜

学年：文月学園二年生

身長：１４４ｃｍ（明久どころか姫路瑞希より…というか学園で最も低い）

容姿：銀色の髪をストレートにして太もも辺りまで伸ばしている（本人は邪魔で切りたがっているが両親に猛反対されている）。瞳の色は深い青色、低い身長にも関わらず瑞希以上の胸をほこっている

（そのため美波は敵意を持った視線を向けるほど）。所謂（いわゆる）ロリ巨乳。

成績：得意教科は英語と物理。苦手教科もなく、どれもそつなくこなす。

性格：家族内では豪快で強気。学園内では正体を隠してるため敬語で話し、心の中で毒づくタイプ。

召喚獣：ユナをデフォルメし、ピンクのフワフワな帽子とフリフリの服、ツルハシのように先が少し尖った杖を持っていて、所謂某カードを封印する幼女のような姿をしている。

備考：父が日本人、母がスウェーデン人のハーフで柏木勇が性転換した姿。あまりに違いすぎる容姿（でも母親似）のため、勇の従妹として文月に転校するも振り分け試験後なためにに自動的にFクラス行きに。

名前：柏木雄一（かしわぎ　ゆういち）

イメージCV：森川智○

備考：勇（ユナ）の父。女化した息子に毎回ともに入浴をせがむが妻の教育（オ）的指導（ハナシ）に毎回妨害されている。息子の女性化の件についても楽観的で、むしろ娘ができたと喜んでいる。

名前：柏木エリス（かしわぎ　エリス）

旧姓：エリス・フリストフォード

イメージCV：井上喜○子

備考：勇（ユナ）の母で、名前のとおり外国人。二児の母と思えないほど若

々しい女性でユナと並ぶと姉妹に見えるほど。銀色の髪を肩にかかる程度にして若干ウェーブがかかっている。性格はおっとりお母さんタイプだが怒ると笑顔で折檻する（瑞希みたいな感じ）。今回の件ではあっさり息子の女性化を受け入れ色々な手続きを積極的に行っている。

名前：柏木祐二（かしわぎ ゆうじ）

イメージCV：宮野真○

備考：勇（ユナ）の弟で中学三年生。容姿は父親似でよくも悪くもない。兄が姉に変わったのを最も戸惑っていて、なかなか現状を受け入れられずにいる。

オリジナルキャラ紹介（後書き）

相変わらず文章が拙いですが、読んでいただければ幸いですm（＿）m

第1話：なぜこうなった？

突然だが、皆さんは”性転換”というのをご存知だろうか？
まぁ所謂(いわゆる)性別の転換…男が女に、女が男にというものだ。最近は緩和されつつあるが、やはり嫌悪される傾向にある。（注：個人的認識です）

その方法も色々あるわけだが基本的に”男が完全な女になれるわけがない”というのが俺の見解だ

だってそうだろう？男にはシンボルたるアレがあり、女にはない…ともないがこの辺りは医学的な見地(けんち)の範囲になるため割愛させていただく。

…つまり何が言いたいかと言うとだ、俺自身も非常に混乱しているわけで。
有り体にいうと”俺こと柏木勇が女の子になってた”わけだ

しかも銀髪ロリに。いや、銀髪なのは母であるエリス母さんの血筋なので納得できる。母は北欧の一国、スウェーデンの出身だ。北欧といえば戦乙女ヴァルキリーの逸話が…と、また話がそれかけた。

???「ユウ君？さっきからどうしたの？」

俺の目の前に座る見た目１０代にしか見えない銀髪美人…母である柏木エリスが不思議そうな眼差しで顔を傾けていた。

「…まだ色々と混乱してるので」

俺が深く溜め息つきながら答えると心配そうな表情で見返してきた

エリス「そうよねぇ…こんなに可愛くなってしまったものね…」

母さんの言葉に隣に座っていた弟の祐二がツッコミを入れる

祐二「いや母さん！その子の言うこと信じるの？！どう見たって兄さんとは違いすぎるじゃないか！」

？？「まあ祐二落ち着きなさい」

そこで父である柏木雄一がやんわりと宥(なだ)める。

なぜこんなことになったかというと…朝起きた時の違和感に慌てて洗面所に向かい、鏡を見ると女の子になっていた。それを母さんが目撃、そのまま俺を居間に連行して父さんと祐二を呼んで家族集合…ということになったわけである。

そして家族は対面に母さん、隣に祐二、俺の隣に父さんが座っていた…なぜか俺の肩に手を置きながら。

エリス「…雄一さん？」

突如エリス母さんから黒いオーラが立ちこめる（たぶん幻。そうに違いない）

雄一「っ！？…い、いや、冗談だよ母さん」

嫌だなあと豪快に笑うが時既に遅し

エリス「あとで”ＯＨＡＮＡＳＩ”しましょうね？」

雄一「……はい」

父さんはがっくりと項垂れた

祐二「親父も母さんも！その子が兄さんって信じてるのかよ！」

祐二がバンッ！とテーブルを叩いて主張する…あ、俯いてる。痛かったんだな

エリス「ええ。だって今のユウ君は私の若い頃にそっくりだもの♪」右頬に手を当てて笑顔になるエリス母さん。見た目若いからそんなポーズも可愛く見えるな

エリス「胸は私よりお母さん似ね」

エリス母さんのお母さん…俺や祐二の祖母にあたる人だ。たしかセシリアさんっていったっけ。

「でもこの背丈でこの胸はないだろ…」

俺は再び深く溜め息つきながら自分の胸を持ち上げる。今の俺の背丈はかなり低い。大体中学1年生女子の平均くらいか下手すれば小学校高学年くらいの身長しかないはず。…なのに、胸だけはグラビアアイドル並みにデカイのだ。アンバランスも甚だしい…その様子を横目で見ていた父さんが黒い笑顔の母さんに見られて小さくなっていた

エリス「測ってみないとわからないけど…おそらくＥかＦカップく

らいはあるんじゃないかしら。私のお母さんも結構大きかったわよ？」

雄一「え、F…」

父さんがゴクリと喉を鳴らすと再び黒い笑顔で母さんは父さんを見た

エリス「雄一さん」

雄一「は、はい！」

エリス「だめですよ？娘に手を出しては」

雄一「何を言うんだ母さん、私は父親として「雄一さん」…ごめんなさい」

母さんがさらにどす黒いオーラを放った笑顔を向けると父さんはその場で土下座した

祐二「じゃなくて！父さんもその子が兄さんだって信じてるのかよ！」

祐二の強い口調の問いかけに土下座していた父さんは再び椅子に座り、普段の豪快な笑みを浮かべる

雄一「ああ、今の勇は初めてスウェーデンで出会った頃の母さんにそっくりだからな」

エリス「私にもわかるわよ。この子は姿形が変わっても私と雄一さんの子供だって」

母さんも穏和な笑みを浮かべながら、父さんと俺を順に見る

祐二「…わかったよ、信じればいいんだろ」
半ば呆れ気味に言い捨て、不機嫌そうな表情を浮かべて立ち上がる
祐二を俺がひき止める。俺が祐二を見上げると不機嫌な表情を隠さ
ずに睨み付けてきた

「祐二…ちょっとかがんでくれないか？」

祐二「は？」

祐二は何言ってんだ？というような表情をしながらも俺の目線の高
さまで屈(かが)んできた
「……な？」

俺が祐二の耳元で兄弟しかしらない秘密を囁くと祐二が目を見開いた

祐二「な、ななななんでその事を！？」

「お前は信じてないみたいだったからな。これが俺が兄である証拠
だ。こんな話誰にでもするわけないだろ？」

父さんと母さんが不思議そうな表情をするなか、俺は得意気に両手
を腰にあてながら胸を張る…巨乳だから思いきり揺れたがこの際ス
ルーしておく

祐二「あ、ああ…信じるよ、”姉ちゃん”」

「Σな！？」

小さくため息をついた後、どこか吹っ切れたような表情をしながら
祐二はそんなことをのたまいやがった
ちなみに驚愕する俺を見て父さんと母さんは笑っていた
雄一「プククク…よ、よかったじゃないか勇…ゆ、祐二にも納得してもらえて…ククク…！」
エリス「クスクス…そ、そうよユウ君…よかったじゃない…ウフフ…！」
祐二「だって今の兄さんは”女”なんだろ？じゃあ兄さんだと変だし…そのナリだと姉さんより姉ちゃんかなってさ」
祐二も上手いこと言ったといわんばかりにククク…と笑っている
「わ、笑うなぁーー！！」
俺が小さいナリに大きくなってしまった胸を揺らしながら絶叫した。
なんだか今の俺の声はどこぞのカードを封印する幼女の声に似てると思ったのは余談だ

閑話休題

エリス「さて、真面目な話をするけど「やはりふざけてたのか…」
ユウ君も茶化さないの」
話を戻そうとする母さんに俺がポツリと呟くとやんわりとたしなめてきた。さながら幼い子供を叱る母親のようだ

…正真正銘母親なわけだが。

エリス「元に戻れる見込みはないのね？」

「ないと思う。なった原因もわからないから戻る方法もわからないし」

俺はどこぞの漫画や小説であるところの「朝起きたら女の子になってた」という不明パターンで女性化している。だから現状どうしようもないというところだ

エリス「なるほど…」

母さんが眉間に皺を寄せて暫し悩んだのちにニッコリと微笑みながら言った

エリス「じゃあ女の子として生活していくことにしましょう。まずは今のユウ君は今後は”ユナちゃん”ね」

「「「……は？」」」

あまりの急展開に母さん以外の全員がポカーンとした。

エリス「ユウ君を若干訛らせてみたの。気に入らなかった？」

小首を傾げて伺うような眼差しを向ける母さん。

「いや…そうじゃなくて、なんで名前を？」

エリス「だって戻れる見込みはないのでしょう？それなら女の子として生きていくしかないじゃない？だから女の子としての名前を決

めないと」

俺の疑問にさも当然と言わんばかりの表情を浮かべて答える

「別に勇のままでも…」

エリス「ダメよ。他のみんなにも説明するの？近しい私たちならともかく、ユウ君のことをあまり知らない人には信じてもらえないと思うわよ？」

たしかに母さんの意見はもっともだ。今の俺は以前と見た目が違いすぎる。だから信じる者もほとんどいないだろう

「むぅ…たしかに。つまり母さんは柏木勇ではなく、”柏木ユナ”として生活しろと？」

エリス「ええ。ユウ君との関係を聞かれたら従妹だと名乗ればいいわ。」

「戸籍とかは？何かのトラブルに巻き込まれた時に身分を証明出来ないと困るだろ？」

エリス「その辺りのことも母さんにまかせなさい♪」

ニッコリ笑いながら右手で自分の胸を叩く。

そんなわけで。俺は柏木ユナとしての生活が幕をあけたわけだ。この先どうなることやら…あ、振り分け試験どうしよう…？

続く

第2話：まさか別人を演じるとはね…

俺が文月学園に入学して2度目の春…と言いたいところだが、”今の俺”は初めての春だったりする。

そう、俺こと柏木勇は新たに”柏木ユナ”という転校生として文月学園に通うこととなった。

あれから母さんの言葉通り柏木ユナとしての戸籍を与えられ、以前と同じ文月学園に転校生として通うことになったのだ。

ちなみに制服に袖を通す時に改めて見たが俺の容姿は大分変わっていた。

太ももまで伸びるストレートの銀髪、深海のような深い青色の瞳、中学生か下手すれば小学生にも見えかねない小柄な体躯、でもそれに不釣り合いな大きな胸…

「…はぁ…」

俺は深く溜め息をついた

憂鬱なのは転校生として通うからだけではない。結局のところ振り分け試験が受けられなかったからだ

あれから母さんと父さんが奔走して今の俺の戸籍の取得、母さん達との間柄（結局のところ俺は柏木家の養女ということになった。たしかに母さんの妹は実在するが細かな帳尻合わせが困難だったからだそうな）、制服の用意ｅｔｃ…などで気がついたら振り分け試験

日を過ぎていたためである。
文月は試験校である。その特異性故にどんな理由であれ振り分け試験を受けないのは無得点ということになる。それが転校生であっても例外ではないのだ

とどのつまり、俺は無得点として結果振り分け試験最下位ということになるのである。

そこでふと、1人の人物を思い出して呟く。

「噂の観察処分者と同じクラスか…」

”観察処分者”吉井明久。文月学園始まって以来（といっても文月の歴史自体浅いが）の問題児にして稀代のバカである。

彼に関しては色々逸話があるらしいが俺は詳しいことは知らない。だが”観察処分者”の肩書きを持ってる以上ろくな内容ではないだろう。

振り分け試験にしても彼が真面目に受けようがサボろうが彼の頭脳では最下位クラスは間違いないだろう

ちなみに俺は真面目に受けられていればBクラスはいけていた。あの霧島翔子や姫路瑞希みたいに極端に成績は良くないが常に上の下くらいは取っていたからだ

つまりいうところの”器用貧乏”というやつだ…あまりいい表現ではないがな。

…と、思考の海に浸かってるうちに慣れ親しんでいた文月の校門が

見えてきた
??「貴様が転校生だな?」
俺が校門をくぐり抜けるとそこには浅黒い肌をした短髪のいかにもスポーツマン然とした男が立っていた…以前もわりとデカイなと思っていたがこの背丈だと巨人が立ってるように見えるな…

「え、えと…おはようございます」

苦笑いを浮かべながら答える俺。…危うく鉄人と呼びそうになった…今の俺は初対面だから名前を呼ぶ必要はないからな

彼は西村教諭。ちなみに下の名前は知らん。”柏木勇”の時もお世話になったことがないから細かなことはほとんど知らない…ただ、噂程度なら知っているというだけの話だ。渾名(あだな)が鉄人だとか趣味がトライアスロンとか…それだけ聞いても変な先生だと分かる。触らぬ神に祟りなしだ

西村「そうか。これがクラスが書かれた封筒だ。あと教室に行く前に職員室へ行け。俺は他の生徒に渡さなければならないからここを動けん。1人で大丈夫か?」

「大丈夫です、ありがとうございました」

つらつらと説明する西村教諭に愛想笑いで頷き、校舎に入ろうとする。さて…クラスは分かっているからまずは職員室だな
西村「柏木」

そんな中唐突に西村教諭が声をかけてきた

西村「おまえは柏木の従妹だそうじゃないか。今回は残念だったな」

「仕方ないですよ、手続きで試験に間に合わなかったんですし」

見た目に似合わず慰めの言葉をかける西村教諭に対して俺は苦笑いで答える

西村「そうか…まあ、頑張ることだ」

何かいいあぐねた西村教諭に苦笑を浮かべ再び職員室へ向かった

??「ああ、貴女が柏木ユナさんですね」

職員室に入り一部の教師達に注目されるなか、Fクラスの担任を聞くとどこかさえない雰囲気の中年教師が声をかけてきた。

福原「はい、私がFクラス担任の福原慎です。よろしくお願いします」

「えと、柏木ユナです」

自己紹介してきた担任教師に俺も御辞儀する。礼儀作法は母さんに昔から仕込まれたから割りと自然にできる。

福原「…さて、貴女の経歴上、再試験を受けるのが普通なんですが…なにぶん当校は特殊でして」

「いいんです。そういう学校だと伺ってますから」

申し訳なさそうにする福原教諭に母さん譲りの穏和な笑みで答える。

女の子らしい仕草も手続きまでの数日間で母さんに徹底的に仕込まれたからな…母さん怒ると怖いし。
福原「そうですか、そう言ってもらえると助かります。…ではそろそろ時間ですから行きましょうか」

「あ、はい」

ゆっくり立ち上がって入り口に向かう福原教諭に慌ててついていく俺。歩幅も狭くなっているので小走りしないとついていけないのが少し悲しかった

福原「貴女は柏木勇君の従妹だそうですね。彼はどうしてますか？」

教室に向かう道すがら尋ねてくる福原教諭。こういう質問は想定していたので特に慌てることはない

「はい、病気療養のためにエリス叔母さまの故郷のスウェーデンに行ってます」

福原「そうですか、北欧諸国は医療体制がしっかりしていますからね。…いつ戻られるかわかりますか？」

俺が答えた返答に納得し再び質問してくる福原教諭。俺は曖昧に答えながら苦笑した。事実いつ男に戻るか分からんし。

とか色々福原教諭と雑談を交えている内にFクラスの前まで来た…これは予想以上だな。2ーFと記載された看板はボロボロ、この分だと中はもっと酷いだろう。さながら廃屋といった佇まいだ

福原「貴女はここで待っていて呼んだら入ってきて下さい」

福原教諭の言葉に無言で頷く。転校なんて初めての経験だからやはり緊張するな…
福原教諭の指示通り、教室のドアの前で待機すると中から声が聞こえてきた。

福原『えーと、ちょっと通してもらえますかね？』

教室内に福原教諭の覇気のない声が僅かに漏れ聞こえる。中が混雑しているのだろうか？

福原『それと席についてもらえますか？ＨＲ（ホームルーム）を始めますので』

？？『はい、わかりました』

？？『うーっす』

教室内で少年っぽい声とどこかワイルドな気配のある返事が聞こえた。まあそんなことどうでもいいか。

福原『えー、おはようございます。二年Ｆ組担任の福原慎です。よろしくお願いします』

……チョークの音が聞こえない。チョークすらないのだろうか？それでどうやって授業するつもりなんだろう？かなり心配だ

福原『皆さん全員に卓袱台（ちゃぶだい）と座布団は支給されていますか？不備があれば申し出て下さい』

…卓袱台に座布団…昭和中期の家庭かよ…

『せんせー、俺の座布団に綿がほとんど入ってないですー』

福原『あー、はい。我慢してください』

『先生、俺の卓袱台の脚が折れています』

福原『木工ボンドが支給されていますので後で自分で直してください』

『センセ、窓が割れていて風が寒いんですけど』

福原『わかりました。ビニール袋とセロハンテープの支給を申請しておきましょう』

……ツッコミどころが多すぎて何からツッコめばよいのやら…

福原『必要なものがあれば極力自分で調達するようにしてください』

…自分でねぇ…とりあえず母さんに聞いてクッションでも持ってこようか。…というかいつまで待てばいいのだろうか？

福原『では自己紹介を始める前に転校生の紹介をしましょうか。では入ってきて下さい』

…と、きた。今さらながらに緊張する…教室内もざわついてるみたいだし……よし、母さん仕込みの礼儀作法で乗り切らなければ。

俺は極度に緊張した面持ちでFクラスのドアに手をかけた。

続く

第2話：まさか別人を演じるとはね…（後書き）

大体ストックがなくなるまでは深夜0時を目処に更新していきたいと思います。

第3話：いきなり試召戦争なんて無謀過ぎないかぃ？（前書き）

きりをつけられなかったのでかなり長いです。

第3話：いきなり試召戦争なんて無謀過ぎないかぃ？

俺がゆっくりドアを開いて中に入ると途端に教室内が静まり返った。…かなり緊張するがここは持ち前の度胸と母さん仕込みの礼儀作法で平静を装う。黒板に自分の名前を書こうとして…止めた。ホントにチョークが一本もないし…

俺は内心で溜め息をつき、諦めて正面を向くと穏和な笑みを浮かべてゆっくり声を発した

「初めまして、柏木ユナです。よろしくお願いします」

それから制服のスカートの両裾を摘まんで淑女のような御辞儀をした直後、

「「「「「うおぉぉぉーーー！！！！」」」」

と男子生徒達の歓喜の雄叫びが教室じゅうに広まった

「ユナたん萌えー！」

「ロリ巨乳キター！！」

「なによあの巨乳！生意気！！」

「うおー！！！」

…色々な声が響き渡った…一言物凄い怨みの声が聞こえた気がしたがスルーしておく。

福原「はい、皆さん静かにしてくださいね。では柏木さん、空いてる席に座って下さい」

「わかりました」

相変わらずの覇気のない声で場を収め、俺に着席を促す福原教諭。さて…どこにしようか？

「「「……」」」

再び静まり返ったかと思うと物凄い熱意のこもった視線で男子生徒達が凝視してきた

こんなんじゃどの隣になっても凄いことになりそうだな…さて、どうするか。

そう考えつつ辺りを見回すと、まるで女子生徒が男装しているような雰囲気の生徒が目に入った。あいつはたしか…木下秀吉…？

木下秀吉。木下優子を姉にもつ、”弟”である。つまりは男…なのだが、何故か男に告白されたと言う逸話がある。

その顔立ちから男女の性別を越えた”秀吉”なんて第三の性別だというバカも存在するほどだ。…たしかにいい得て妙であるが、彼の隣なら波風は立たないだろう。

俺は彼の左隣が空いてるのを確認すると静々と移動し、捲れないようにスカートを押さえながらゆっくり座る。あまり意識しなくても女の子らしい仕草が出るようになったのも母さんの教育の賜物だな

「よろしくお願いします」

秀吉「よろしくなのじゃ。ワシは木下秀吉、秀吉でよいぞい」

秀吉は見た目に反したジジイ言葉で答える。似合わないなぁと思ったが、彼なりの自分の容姿の配慮なのかもしれない。

そして俺の予想通り他の生徒は秀吉には敵意の視線を向けなかった…が、美少女が並ぶと絵になるなの言葉に軽く凹んだ

福原「では、自己紹介を始めましょうか。そうですね…廊下側の人からお願いします」

福原教諭の指名を受け、秀吉が立ち上がり名前を告げる。

秀吉「木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる」

なるほど、秀吉は演劇部なのか。それにしても…独特の言葉遣いと小柄な体（俺よりは大きいが）。肩にかかる程度の長さの髪をゆったりと縛ったいでたち…

よくよく見ても女の子みたいだなと思う。

秀吉「ーーと、いうわけじゃ。今年一年よろしく頼むぞい」

軽やかに微笑みを作って自己紹介を終える秀吉。…男が見たら惚れそう…というか秀吉も男なんだが。

ちなみに俺は特に何も感じなかった。精神まで女性化してきてるのだろうか？いや、あいつは男だから何も感じないのは自然なのか？……なんだかわけがわからなくなってきた…

康太「……土屋康太」

俺が軽く混乱しているといつの間にか次の生徒が立ち上がって同じように名前を告げていた。

俺の印象では無口で目立たない男だというのが正直なところだ。…というかまわりは男ばかりだな。もしかしてこのクラスの女子は俺だけか？さっき自己紹介した時に女子の声が混じってた気がしたが。

？？「ーーです。海外育ちで、日本語は会話はできるけど読み書きが苦手です」

軽く凹み気味になってるとまた次の人が自己紹介していた。名前は聞きそびれたけど俺以外の初めての女子だな…俺は”まがい物”であっちは”生粋”だが。

？？「あ、でも英語も苦手です。育ちはドイツだったので。趣味はーー」

ほう、帰国子女ってやつか。試験ができなかったのは日本語が読めなかったって話か…才女ってところ…

？？「趣味は吉井明久を殴ることです☆」

…ではないか。才女ならこのクラスにいないだろうし。

？？「はろはろー」

明久「……あぅ。し、島田さん」

2人のやりとり（というか趣味の時点で気付くが）で知り合いなのだとわかる。ネコのようなツリ目の勝ち気な眼差し、黄色いリボンでポニーテールにした髪…そして平らな胸…あ、そうか。さっきの怨みの声は彼女だったのか…

それから淡々と自分の名前を告げるだけの作業が進む。

ちなみに俺は転校生で最初に自己紹介したので免除された。他の生徒は色々聞きたそうにしていたがな。

と、しばしボーッとその場を眺めていると次は吉井明久の番になった。彼は軽く息を吸うとおもむろに立ち上がる。

…それから何か考えていたのか僅かに悩んだ表情するがすぐに爽やかな笑顔になる。

明久「ーーコホン。えーっと、吉井明久です。気軽に『ダーリン』って呼んで下さいね♪」

『『『ダァァーーリィーーン！！』』』

…うわ…これはキツイかも…ここのノリの良さはとんでもないな

明久「ーー失礼。忘れて下さい。とにかくよろしくお願いします」

吉井明久が引きつった笑みを浮かべながら席に着く。考えなしに言うからだよ…自分だけならともかく、周りに被害が及ぶことするな

それから再び単調な自己紹介が続く。もの凄い緊張感が抜けたせいか疲れで眠くなってきた頃に不意にガラリと教室のドアが開き、息を切らせて胸に手を当てている女子生徒が現れた。

??「あの、遅れて、すいま、せん……」

『えっ?』

誰からというわけでもなく教室全体から驚いたような声が上がる。

…こいつは驚いたな、まさか彼女がFクラスとは。

福原「丁度よかったです。今自己紹介をしているところなので姫路さんもお願いします」

瑞希「は、はい!姫路瑞希といいます。よろしくお願いします……」

小柄な身体（といっても俺よりは少し大きいが）をさらに縮こめるようにして声を上げる姫路瑞希。

肌は白く背中まで届くややウェーブがかかった髪…俺が男のままなら好みのタイプなのだが、今は何も感じなかった。精々友達になれたらいいなくらいしか。…本格的に女になってきたのだろうか…俺は再び凹んだ。

…と、軽く頭を突っ伏していると唐突に男子生徒の一人が高々と右手を挙げた

「はいっ!質問です!」

瑞希「あ、は、はいっ。なんですか?」

自己紹介でいきなり質問をされて驚く姫路瑞希。あの仕草は勉強になる…って、何を考えてるんだ俺は。

「なんでここにいるんですか？」

聞きようによっては失礼な質問が浴びせられる。たしかに彼女の成績ならここに来るのはあり得ないが…おそらく振り分け試験で何かあったのだろうと推測はできる。

瑞希「そ、その……」

緊張した面持ちで身体を硬くしながら口を開く。

瑞希「振り分け試験の最中、高熱を出してしまいまして……」

なるほど、彼女は身体が弱いと聞いたことがある。おそらく体調不良を押して出席したが最後までもたずに途中退席したのだろう。試験途中の退席は無得点扱いとなる。彼女はそのせいでFクラス行きになったのだな。

そんな彼女の言い分を聞き、クラスの中でもちらほらと言い訳の声が上がる。

「そういえば俺も熱（の問題）が出たせいでFクラスに」

「ああ。化学だろ？アレは難しかったな」

「俺は弟が事故に遭ったと聞いて実力を出し切れなくて」

「黙れ一人っ子」

「前の晩、ユナたんが寝かせてくれなくて」

「誰ですか貴方？」

「はい、今年一番の大嘘をありがとう」

とりあえず俺をダシに使ったやつにはあとで”ＯＨＡＮＡＳＩ”だな。母さん仕込みの。

瑞希「で、ではっ、一年間よろしくお願いしますっ！」

そんな中、逃げるようにして吉井明久と見た目ワイルドな男（まだ自己紹介してないので名前は知らない）の隣の空いている卓袱台に着こうとする彼女。…やっぱりあの仕草は勉強に…ってまた何考えてるんだ俺…

瑞希「き、緊張しましたぁ～……」

席に着くや否や、安堵の息を吐いて卓袱台に突っ伏す彼女。

俺がしばし彼女を見ていると隣に座る秀吉がポツリと呟いてきた。

秀吉「驚いたのぅ。まさかあの姫路がワシらと同じクラスになるとは」

「そうなんですか？」

俺は一応知ってはいるがとりあえず聞いてみる。

秀吉「うむ、彼女は去年も成績順位が常に一桁じゃったからの。今回は体調不良で途中退席してしまったらしいが、本来ならＡクラスだったはずじゃ」

「なるほど…」

知ってはいるがとりあえず初めて知ったという表情を作る。何故か秀吉が視線を逸らした…何故か顔を赤らめている。それを問い詰めようとすると、

明久「ねぇ雄二！残りの半分は！？」

突然吉井明久が大きな声で隣のワイルドな男（名前は雄二というらしい）に問い詰める。

福原「はいはい。そこの人たち、静かにしてくださいね」

その声で、パンパン、と教卓を叩いて福原教諭が警告を発する。

明久「あ、すいませーー」

バキィッ　バラバラバラ……

突如、福原教諭の前で教卓が瓦礫と化す。…耐久力に難がありすぎだろ…こんな劣悪な施設や備品では余計に授業に支障をきたすと考えないのだろうか？この学園の理事長はバカか？

福原「え～……替えを用意してきます。少し待っていてください」

気まずそうにそう告げると福原教諭は足早に教室から出て行った。

瑞希「あ、あはは……」

姫路瑞希が苦笑いを浮かべている。それを吉井明久が見ていて初めて真面目な表情で何やら考えていた

明久「……雄二、ちょっといい？」

あくびをしている隣の男…雄二？に声をかけた。

雄二「ん？なんだ？」

明久「ここじゃ話しにくいがら、廊下で」

雄二「別に構わんが」

２人が立ち上がって廊下に出ていく。その吉井明久を姫路瑞希は目で追っていた。

？？「アンタ柏木だっけ？」

後ろから唐突に声がかかったので振り向くと、先程の吉井明久を殴るのが趣味の彼女がいた。

美波「ウチは島田美波…ま、さっき自己紹介したけど、改めてよろしくね」

「はい、柏木ユナです。よろしくお願いします、島田さん」

美波「このクラスで数少ない女子同士なんだし、美波で構わないわよ。その代わりウチも柏木のことユナって呼んでもいい？」

勝ち気そうな目を細めて笑顔を向けながら右手を差し出してくる美波。…まあ、今の俺は女なんだし、女子の友達を作るのは自然かな。

「いいですよ、改めてよろしくお願いします、美波」

美波「うん、よろしくね☆ユナ！」

俺は美波と握手を交わす。それから彼女は手を放すと、様子を見ていた姫路瑞希を引っ張って連れてきた。瑞希「あ、あの…？」

彼女が困ったようなオドオドした表情を見せる。まあ、彼女が自己紹介した時には美波はもう終わったあとだったしな。

美波「ウチは島田美波、美波でいいわよ。それでこっちのロリっ娘が柏木ユナよ」

ロリっ娘いうなっ。

瑞希「えっと、姫路瑞希です、よろしくお願いします、美波ちゃん、柏木さん」

「私のこともユナでいいですよ、姫路さん」

美波の紹介にペコリと御辞儀して名乗る姫路さん。それに対してここでも母さん譲りの温和な笑みを浮かべながら答えた。

瑞希「では私のことも”瑞希”と呼んで下さいね、ユナちゃん♪」

ニッコリ微笑みながら答える姫路さん改め瑞希ちゃん。ちなみに俺の視界の外で男子生徒が萌え倒れていたがその辺はスルーだ

そんな女子同士の華やかなトークを展開していると、先程廊下に出ていた吉井明久と雄二？が戻ってきた。

それとほぼ時を同じくして先程と大差ないオンボロの教卓を福原教諭が運んできてＨＲが再開される。

須川「えー、須川亮です。趣味はーー」

それ以降特に何も起こらず、再び淡々とした自己紹介が続く。

福原「坂本君、キミが自己紹介最後の一人ですよ」

雄二「了解」

福原教諭に呼ばれて雄二（名字は坂本というらしい、ここで初めて知った…）が席を立つ。

ゆっくりと教壇に歩み寄るその姿には先程の不真面目さは全く見えず、少々以外だと思った。

福原「坂本君はＦクラスのクラス代表でしたよね？」

福原教諭に聞かれて鷹揚にうなずく彼。なるほど、Ｆクラスの代表は彼だったのか…と言っても最下位クラスの代表だから凄くもなんともないが。

にも関わらず、彼は自信に満ちた表情で教壇に上がり、俺達の方に向き直る。

雄二「Ｆクラス代表の坂本雄二だ。俺のことは代表でも坂本でも好きなように呼んでくれ」

俺は普通に坂本君だろうか。下の名前は弟と同じ名前だからややこ

しいし。

雄二「さて、皆に一つ聞きたい」

彼がゆっくりと全員の目を見るように告げる。…こいつ、バカのように見えて只者じゃないな。こういう話術に長けた者は得てして頭の回転は速い、つまり頭のいい部類のはず。それがこのクラスにいるわけだから彼もそれなりの理由があるのだろう。

坂本は皆の様子を確認した後、視線は教室内の各所に移りだす。

かび臭い教室

古く汚れた座布団

薄汚れた卓袱台

つられて俺達も彼の視線を追い、それらの備品を順番に眺めていった。

雄二「Aクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしいがーー」

一呼吸おいて静かに告げる。俺は嫌な予感がして両耳を塞いだ。

雄二『ーー不満はないか？』

『『『大ありじゃぁっ！！』』』

Fクラス生徒の魂の叫び。直に聴いていたら耳が聞こえなくなってたかもしれないな…ちなみに秀吉は演劇で慣れているのか平気な顔

（と言っても驚いていたが）をしていた。

雄二「だろう？俺だってこの現状は大いに不満だ。代表として問題意識を抱いている」

「そうだそうだ！」

「いくら学費が安いからと言ってこの設備はあんまりだ！改善を要求する！」

「そもそもAクラスだって同じ学費だろ？あまりに差が大きすぎる！」

堰（せき）を切ったかのように次々あがる不満の声。それに対しては俺も賛同するな。こんなんじゃ、まともな授業も受けられない、つまり勉強も出来ない、成績がさらに落ちる、悪循環だ。

雄二「みんなの意見はもっともだ。そこで」

クラスの反応に満足したのか、自信に溢（あふ）れた顔に不敵な笑みを浮かべる。……まさか。

雄二「これは代表としての提案だがーー」

彼は野性味満点の八重歯を見せ…

雄二「ーーFクラスはAクラスに”試験召喚戦争”を仕掛けようと思う」

Fクラス代表、坂本雄二は戦争の引き金を引いた。…って、やっぱりこうなるのか…新学期早々かよ…

続く

第3話：いきなり試召戦争なんて無謀過ぎないかぃ？（後書き）

Eエブリスタに掲載してるストックがなくなったので更新がしばらく遅れますぃ

第４話：戦力確認ねぇ…って、俺も数に入ってるの！？（前書き）

Ｅエブリスタの方を更新したので時間遅れで投稿ですｍ（　）ｍ

第４話：戦力確認ねぇ…って、俺も数に入ってるの！？

Ａクラスへの宣戦布告。それはあまりＦクラスにとって現実味のある提案には思えなかった。

「勝てるわけがない」

「これ以上設備を落とされるなんて嫌だ」

「姫路さんとユナたんがいたら何もいらない」

そんな悲鳴が教室内のいたるところから上がる…というかまたアイツか。とりあえずやつは”オハナシ”をしないとならんな。

文月学園に点数の上限がないテストが採用されてから四年が経過した。

このテストには一時間という制限時間と無制限の問題数が用意されている。その為、テストの点数は上限がなく、能力次第でどこまでも成績を伸ばすことができる。また、科学とオカルトと偶然により完成された『試験召喚システム』というものがある。これはテストの点数に応じた強さを持つ『召喚獣』を喚び出して戦うことのできるシステムで、教師の立会いの下で行使が可能となる。

学力低下が嘆かれる昨今、生徒の勉強に対するモチベーションを高めるために提案された先進的な試み…その中心にあるのが、召喚獣を用いたクラス単位の戦争…試験召喚戦争と呼ばれる戦いだ。

…って、誰に説明してるんだ俺は…

…で、だ。その戦争で重要になるのがテストの点数なんだが、Ａク

ラスとFクラスの点数は文字通り桁が違う。正面からやりあったとしたら、Aクラス一人に対してFクラス三人でも勝機が薄い。しかも成績上位一桁台なら五人以上でも負けるはずだ。

雄二「そんなことはない。必ず勝てる。いや、俺が勝たせてみせる」

彼は策を弄するつもりらしいが、戦力が拮抗した相手ならともかく…Aクラスにはどんな策も通用しないと思うが…何かあるのだろうか？

「何を馬鹿なことを」

「できるわけないだろう」

「何の根拠があってそんなことを」

否定的な意見が教室中に響き渡る。

雄二「根拠ならあるさ。このクラスには試験召喚戦争で勝つことのできる要素が揃っている」

彼の言葉にクラスの皆が更にざわめく。…なるほど、このクラスは本来の成績以上に癖がある奴等が揃っている。坂本はそう言いたいのだろう

雄二「それを今から説明してやる」

不敵な笑みを浮かべ、壇上から見下ろす彼。俺から見たら巨人のようだな…

雄二「おい、康太。畳に顔つけて姫路と柏木のスカートを覗いてないで前に来い」

康太「……！！（ブンブン）」

瑞希「は、はわっ」

「ふぇっ！？」

必死になって顔と手を左右に振り否定のポーズを取る康太と呼ばれた男子生徒。瑞希ちゃんと俺がスカートの裾を押さえながら遠ざかると、ヤツは顔についた畳の跡を隠しながら壇上へと歩き出した。…アノヤロウ、完全に俺が油断したとはいえ、ここまであからさまに覗くなんて…とりあえずヤツにはみっちりと”オハナシ”しなくては。

雄二「土屋康太。こいつがあの有名な、寡黙なる性識者（ムッツリーニ）だ」

「……！！（ブンブン）」

土屋康太という名前はそこまで有名じゃない。だが、ムッツリーニという名前は別だ。その名は男子生徒には畏怖と畏敬を、女子生徒には軽蔑を以て挙げられる…今後は俺も対象ってことになるな…

…それにしても、ヤツがムッツリーニだったとは。それならばあの行動も理解できる…かくいう俺も、”勇”だった頃はヤツにつながる筋の色々な物を買っていたからだ

「ムッツリーニだと……？」

「馬鹿な、ヤツがそうだというのか……？」

「だが見ろ。あそこまで明らかな覗きの証拠を未だに隠そうとしているぞ……」

「ああ。ムッツリの名に恥じない姿だ……」

畳の跡を手で押さえている姿が果てしなく哀れを誘う。たとえどういった状況であろうとも、自分の下心は隠し続ける。異名は伊達じゃないな。…将来が凄く心配になるが。

瑞希「？？？」

瑞希ちゃんは頭に多数の疑問符を浮かべているみたいだな…純真な彼女はムッツリのあだ名の由来がわからないのだろう。

雄二「姫路のことは説明する必要はないだろう。皆だってその力はよく知っているはずだ」

瑞希「えっ？わ、私ですかっ？」

雄二「ああ。ウチの主戦力だ。期待している」

たしかに彼女の実力はＡクラス上位に勝てる戦力だからな。このクラスのエースと言えるだろう

「そうだ。俺たちには姫路さんがいるんだった」

「彼女ならＡクラスにも引けをとらない」

「ああ。彼女さえいれば何もいらないな」

…なんだかさっきから瑞希ちゃんに大胆告白してるやつがいるな…

雄二「木下秀吉だっている」

そういえば彼女…じゃなかった、彼も演劇部のホープとして名が知れてるしな

「おお……！」

「ああ。アイツ確か、木下優子の……」

雄二「当然俺も全力を尽くす」

自信満々な坂本を見てクラスの面々は再び騒ぎ始める。

「確かになんだかやってくれそうな奴だ」

「坂本って、小学生の頃は神童とか呼ばれていなかったか？」

「それじゃあ、振り分け試験の時は姫路さんと同じく体調不良だったのか」

「実力はAクラスレベルが二人もいるってことだよな！」

雄二「あと、俺としては転校生の柏木の未知数さにも期待している」

「ふぇっ？」

指摘範囲外だと思っていた俺の名前が唐突に出されたために変な声を上げてしまった…

「そうだよな、あの容姿は相手の度肝を抜けるかもしれないしな」

「ああ、ロリ巨乳なんて漫画やエロゲの産物だと思ってたからな」

「ユナたん萌え～！」

クラスの奴等はさらに騒ぎ出す。…まあ、振り分け試験は受けてないから容姿ばかりを挙げるのは仕方ないが…というかまたあいつか。

雄二「それに、吉井明久だっている」

……シンーー

俺を紹介した時点で最高潮に高まっていた士気が一気に下がる。…まあ、奴は戦力としてではなく、別の使い方になるだろうがな。

明久「ちょっと雄二！どうしてそこで僕の名前を呼ぶのさ！全くそんな必要はないよね！」

ま、普通はそうだわな

「誰だよ、吉井明久って」

「聞いたことないぞ」

名前のほうはさほど有名じゃないしな。なんで俺が知っているかと言うと…長くなるからまた今度に…って何言ってるんだか…ι

明久「ホラ！折角上がりかけてた士気に翳りが見えてるし！僕は雄二たちとは違って普通の人間なんだから普通の扱いをーーって、な

んで僕を睨むの？士気が下がったのは僕のせいじゃないでしょう！」
雄二「そうか。知らないようなら教えてやる。こいつの肩書きは【観察処分者】だ」
…まあ、肩書きのほうが有名だからなあいつは…ただし悪い意味で。
「……それって、バカの代名詞じゃなかったっけ？」
クラスの誰かがポツリと呟く。…普通の認識ではそうだが、”それだけ”では観察処分者にはならない。成績に加えてさらに何かしら問題を起こさないとな。ちなみに何故それを知っているかというと、俺にはその手の情報に詳しい”知り合い”がいるからだ。この姿になってからは当然会ってはいないが、アイツのことだ。いずれ接触してくるだろう
明久「ち、違うよっ！ちょっとお茶目な１６歳につけられる愛称で」
雄二「そうだ。バカの代名詞だ」
明久「肯定するな、バカ雄二！」
瑞希「あの、それってどういうものなんですか？」
瑞希ちゃんが小首を傾げている。まあ、優等生の彼女には無縁の物だからな
雄二「具体的には教師の雑用係だな。力仕事とかそういった類の雑用を、特例として物に触れるようになった試験召喚獣でこなすといった具合だ」

本来試験召喚獣は物に触ることはできない。もし触れるようになったら力は人間の数倍らしいからそれこそ一大事だからな
瑞希「そうなんですか？それって凄いですね。試験召喚獣って見た目と違って力持ちって聞きましたから、そんなことができるなら便利ですよね」

瑞希ちゃんの目がキラキラ輝いている。そんな大層なものじゃないんだけどね…

明久「ああは。そんなたいしたもんじゃないんだよ」

吉井明久が手を振って否定する

「おいおい。【観察処分者】ってことは試召戦争で召喚獣がやられると本人も苦しいってことだろ？」

「だよな。それならおいそれと召喚できないヤツが一人いるってことになるよな」

そう。どこかの男子生徒の言葉通り、吉井明久の召喚獣は物に触れることは出来るが、そもそも試験召喚獣は教師の承認なくては召喚出来ない。しかもメリットであるはずの”物に触れることができる”利点も召喚者に”フィードバック”される負担によって、結局のところ普通の召喚獣より劣ってしまうわけだ

雄二「気にするな。どうせいてもいなくても同じような雑魚だ」

ものはいいようだな。それならここで挙げる必要性はそれこそないだろう。そこまで思慮の浅い奴とは思えないが

明久「雄二、そこは僕をフォローする台詞を言うべきところだよね

？」

そうとはわからない吉井明久は悲しげに質問する

雄二「とにかくだ。俺達の力の証明として、まずはＤクラスを征服してみようと思う」

明久「うわ、すっごい大胆に無視された！」

吉井明久が驚愕の表情でツッコミをいれる。色々と報われない奴だ

雄二「皆、この境遇は大いに不満だろう？」

『当然だ！！』

雄二「ならば筆（ペン）を執れ！出陣の準備だ！」

『おおーーっ！！』

雄二「俺達に必要なのは卓袱台ではない！Ａクラスのシステムデスクだ！」

『うおおーーっ！！』

瑞希「お、おー……」

「……」

クラスの雰囲気に圧されて瑞希ちゃんも小さく拳を作って掲げる。

俺は無言で状況を見つめつつ進級初日から試召戦争かよ…と内心げ

んなりしていた

続く

第４話：戦力確認ねぇ…って、俺も数に入ってるの！？（後書き）

次回の更新もあちらを更新次第、投稿させていただきますι

第5話：戦略会議は得てして重要なものだ。…が、こんなに話がこじれるのは何

Eエブリスタに更新してからこちらを更新してるのでかなり遅れました（＿＿）m m

第5話：戦略会議は得てして重要なものだ。…が、こんなに話がこじれるのは何

雄二「明久にはDクラスへの宣戦布告の使者になってもらう。無事大役を果たせ！」

坂本が吉井を使者に任命する。この場合の使者は生け贄と同義だな

明久「……下位勢力の宣戦布告の使者ってたいてい酷い目に遭うよね？」

流石に漫画やゲームでの知識なのか、吉井もその意図に気付いているようだ。が、

雄二「大丈夫だ。やつらがお前に危害を加えることはない。騙されたと思って行ってみろ」

明久「本当に？」

雄二「もちろんだ。俺を誰だと思っている」

稀代の名軍師並みの策士だな。もしくは詐欺師。

雄二「大丈夫、俺を信じろ。俺は友人を騙すような真似はしない」

…詐欺師にいそうな手口だな。こいつの人となりはある程度しか見ていないがかなり頭の切れる奴だ。態度には全く出さずに強い口調で相手を丸め込む。こいつには詐欺師と口先の魔術師の称号を送ろう。

……言うつもりはないが。

明久「わかったよ。それなら使者は僕がやるよ」

雄二「ああ、頼んだぞ」

そうとは知らず、吉井はあっさり騙されて毅然とした態度で教室を出ていった。…やれやれ。

明久「騙されたぁっ！」

案の定、吉井が転がり込むように教室に入ってきた。それを見下すような視線を坂本が向け、

雄二「やはりそうきたか」

平然と言い放つ。こいつ外道だな

雄二「……？」

明久「どうしたの、雄二？」

雄二「いや…俺への罵詈雑言が聞こえた気がしたんだが…気のせいか」

明久「変な雄二」

坂本が不思議そうな表情しつつ回りを見渡した。こいつ…俺の電波を感じたのか？…って、なんだそりゃ。

瑞希「吉井君、大丈夫ですか？」

ボロボロになっている吉井に心配げな表情で駆け寄る瑞希ちゃん。

明久「あ、うん。大丈夫。ほとんどかすり傷」

美波「吉井、本当に大丈夫？」

美波ちゃん（心の中くらいは名字にするか）…島田も吉井に近寄る。でも彼女の心配は別のベクトルに感じるのだが、俺の気のせいだろうか？

明久「平気だよ。心配してくれてありがとう」

美波「そう、良かった……。ウチが殴る余地はまだあるんだ……」

やっぱりか。

明久「ああっ！もうダメ！死にそう！」

吉井が腕を押さえて転げまわる。リアクション芸人か、こいつわ。

雄二「そんなことはどうでもいい。それより今からミーティングを行うぞ」

坂本は扉を開けて出ていくとおもむろに秀吉も立ち上がる。

秀吉「柏木。ワシらも行こうぞ」

「私も参加していいんですか？」

小さく顔を傾けながら質問する。てっきり知り合い内での作戦会議

だから俺は必要ないかと思ったのだが。

秀吉「何を言うておる。おぬしも雄二が挙げた戦力の1人なのじゃから参加して当然じゃろう？」

そう言ってから爽やかな笑顔で手を差し出す秀吉。男女問わず（男子の比率が多そうだが）卒倒ものの笑顔だな。…視界の隅で何人かの生徒が倒れたが無視だ

それから秀吉の手を取り、立ち上がると彼は直ぐに外に行かずに吉井に近寄る。そんな中で瑞希ちゃんは吉井に労いの言葉をかけてから小走りで坂本の後を追った。

秀吉「大変じゃったの」

秀吉も吉井に労いの言葉をかけてから廊下を出ていく

「……」

俺は愛想笑いだけ向けてゆっくり出ていきつつ後ろにいたムッツリーニと吉井の会話に耳を傾けた

康太「……（サスサス）」

明久「ムッツリーニ。覗いていた時の畳の後ならもう消えてるよ」

康太「……！！（ブンブン）」

そう。俺はムッツリーニが”覗いた”のか事実確認すべく残ったのだ。ちなみに今は開いた扉の影でこっそり様子を伺っていたりする。

明久「いや、今更否定されても、ムッツリーニがHなのは知ってるから」

康太「……！！（ブンブン）」

明久「ここまでバレているのに否定し続けるなんて、ある意味凄いと思う」

俺も同感だ

康太「……！！（ブンブン）」

明久「ーー何色だった？」

康太「みずいろとピンクのしましま」

「へぇー…やっぱりですか」

”オハナシ”確定だ。俺は母さん譲り？の黒いオーラを発しながら現れつつゆっくりムッツリーニに近寄る。

康太「……！！！（ブンブンブン！！）」

明久「あ、あれ？柏木さん、先にいったんじゃぃ」

吉井が俺の出現に慌て、ムッツリーニが真っ青な顔をして残像が出そうなくらい高速で首を横に振る。誤魔化そうたって無駄だ。たしかに母さんに無理矢理に履かされた下着がその色なんだからな

「ちょっと忘れ物を取りに。でも今はそんなことを話しに来たんじ

ゃないんですよ？」
康太「……！！！！（ブンブンブン！！）」
「問答無用です」
俺はムッツリーニが必死に首を左右に振るのを無視して淡々とした声色（でもロリボイス）で言い放ち、滑るように高速移動すると、母さん直伝の護身術でしっかり語り合った。もちろん身体にな。具体的には人が可動する限界以上に関節を修正してみたりとか…
閑話休題
美波「ユ、ユナ…それはやりすぎなんじゃ…」
ユナ「美波ちゃんだって吉井君に見られたらや「全殺しね」でしょう？」
苦笑いしながら仲裁に来た島田に例を挙げて言うと即答してきた。
早すぎだろ…
美波「と、とにかく！ほら、吉井も行くわよ」
明久「う、うん。わかったよ」
吉井は逃げる気だったようだが、俺とムッツリーニの”オハナシ”を見てすっかりタイミングを逃したようだ。
それから俺達（ムッツリーニは俺のオハナシで一時的に再起不能にしたのでこの場にはいない）は坂本達に追いつくと、ちょうど屋上に通じる扉に手をかけたところだった。

雄二「遅かったな。…ん？ムッツリーニはどうした？」

明久「え、えーと…」

ムッツリーニがいないことに疑問を浮かべた坂本が吉井に尋ねるが、その吉井は俺を見て複雑な表情をしながら言葉を濁す。

「土屋君なら別の用があるからって出ていきましたよ？」

俺は優しい口調に笑顔で答える。島田は何か言いたげにしていたが、俺とムッツリーニの”オハナシ”を見ていたので何も言わなかった。

雄二「…そうか、なら仕方ないな」

ムッツリーニの今までの行動で盗…もとい、偵察にでも行ったんだろうと思ってかそれ以上は聞かなかった。

それから手をかけていた扉を開いて屋上に出る。ちょうど天気は快晴のようで、雲一つない空から眩しい光が差し込んでいた。それに俺達全員が思わず目を細める。

雄二「明久。宣戦布告はしてきたな？」

坂本が吉井に事の報告を尋ねながらフェンスの前にある段差に腰を下ろす。

明久「一応今日の午後に開戦予定と告げて来たけど」

俺達もそれにならって腰を下ろす…気がついたら俺はお尻を足の間に挟むようにする座り方…所謂”女の子座り”をしていた。無意識

にしていた事実に若干へこんだ…

美波「それじゃ、先にお昼ご飯ってことね？」

雄二「そうなるな。明久、今日の昼ぐらいはまともな物を食べろよ？」

まともって…吉井は残飯でも食ってるのか？

明久「そう思うならパンでもおごってくれると嬉しいんだけど」

坂本におごらせたら後が怖いと思うぞ。それ以前に毒盛られそうだし

雄二「…？」

坂本が不思議そうな表情をしながら軽く辺りを見回す。こいつ変なところで勘がいいのかもな…

明久「雄二？」

雄二「…いや。なんでもない、ただの気のせいか」

明久「？？」

吉井に尋ねられ、自己完結したのか何事もなかったかのように視線を戻した

瑞希「えっ？吉井君ってお昼食べない人なんですか？」

瑞希ちゃんが驚いたように吉井を見る。そこにはどこか心配するような気配も含んでいた…どうやら瑞希ちゃんは吉井が好きなようだ

な。構い方のベクトルが変な方向になってるが、島田も吉井のこと好きみたいだし。

明久「いや。一応食べてるよ」

雄二「……あれは食べていると言えるのか？」

明久「何が言いたいのさ」

雄二「いや、お前の主食ってーー水と塩だろう？」

坂本が哀れむ声で言う。…は？水と塩？どんだけ極貧の生活してるんだよ…今度パンでも恵んでやろうか…あ、でも2人の反応がちょっと怖いな

明久「きちんと砂糖だって食べているさ！」

瑞希「あの、吉井君。水と塩と砂糖って、食べるとは言いませんよ……」

そりゃごもっとも。

秀吉「舐める、が表現としては正解じゃろうな」

皆（俺も含む）が吉井を哀れむ目で見やる

雄二「ま、飯代まで遊びに使い込むお前が悪いよな」

明久「し、仕送りが少ないんだよ！」

こりゃ驚いた。吉井は一人暮らしなのか…どうりでずさんな食生活

を送っているはずだ。というか吉井みたいなバカに一人暮らしさせるなんて両親は何を考えているんだろうか？

瑞希「……あの、良かったら私がお弁当作ってきましょうか？」

明久「ゑ？」

吉井、えの表現が古い。お前は江戸時代の人間かよ

明久「本当にいいの？僕、塩と砂糖以外のものを食べるなんて久しぶりだよ！」

…どんだけ物食ってないんだお前は。あと塩と砂糖は食べるじゃない、舐めるだ

瑞希「はい。明日のお昼で良ければ」

雄二「良かったじゃないか明久。手作り弁当だぞ？」

明久「うん！」

吉井が心底嬉しげな笑顔をする。と、そこで視線を感じたので目を向けると、

秀吉「……」

秀吉が俺に物欲しそうな視線を向けていたが、俺が見たことに気付くと慌てて吉井達に視線を戻した。先程と同じく頬を紅潮させているように見えるが気のせいに違いない。ああ、気のせいだ

美波「……ふーん。瑞希って随分優しいんだね。吉井”だけ”に作

ってくるなんて」

島田が不機嫌な表情をしながら悪態をつく。島田よ。お前の吉井への好意のベクトルは明らかに変だと思うぞ？吉井にツンデレなんて高等テクな伝え方なぞわかるわけなかろうに。

瑞希「あ、いえ！その、皆さんにも……」

雄二「俺達にも？いいのか？」

瑞希「はい。嫌じゃなかったら」

瑞希ちゃんが皆にも作ってくると言い出す。…はて、なぜだろう。今どこかでアラート音やら何かのフラグが立ったような気がしたが…まあ、気のせいだろう。

秀吉「…それは楽しみじゃのう」

美波「……お手並み拝見ね」

秀吉が何故か再び俺をチラ見してから言い、島田が瑞希ちゃんに対抗心を燃えたぎらせながら重々しく呟いた。さっきから秀吉はなんなんだ？

「木下君？なんですか？」

秀吉「いや、その…柏木はお昼はどうするのじゃ？」

「私はエリスおばさまが作ってくれますから」

秀吉の問いかけに素直に答えるとやや意外げな表情をし、

秀吉「柏木は自分で作ったりせんのかのう？」

とのたまってきた

「作れなくはないですが…時間があまりないので」

秀吉「そうか…ワシは柏木の手作り弁当を食してみたかったがのう」

美波「…むっ。ユナも瑞希に対抗して作ろうっての？」

いや、ちょっとマテコラ。

瑞希「ではユナちゃんも作りましょう♪」

「え、あ、いや私は」

明久「え？柏木さんも作ってくれるの？それは楽しみだなあ」

雄二「どんなの作ってくるか楽しみだな」

マテマテマテ！俺は作るとは一言も言ってないぞゴラァ！

美波「…今回は瑞希の実力を見るために静観するつもりだったけど…気が変わったわ。ウチも作る！」

ちょっとまてぃ！話がおかしな方向になってるぞ！

瑞希「では…私、美波ちゃん、ユナちゃんの3人で分担して作ってきましょうか。」

美波「負けないわよ？瑞希、ユナ！」

「あの…はぁ…」

何だかなしくずし的に作るはめに…ちなみに料理自体は母さんに「料理も女の子修行の１つよ☆」と嬉々として仕込まれた…あの日々は思い出したくもない…

秀吉「明久。それでは欲望をカミングアウトした、ただの変態じゃぞ」

…俺がかつての地獄の日々を思い出して項垂れていると、いつの間に話が進んでいたのか、なぜか吉井が変態扱いされていた。わけわからん。

雄二「明久。お前はたまに俺の想像を超えた人間になる時があるな」

明久「だって……お弁当が……」

がっくりと落ち込む吉井。本当になにがあったんだ？

雄二「さて、話がかなり逸れたな。試召戦争に戻ろう」

逸らした張本人はお前だがな、坂本。

続く

第5話：戦略会議は得てして重要なものだ。…が、こんなに話がこじれるのは何

原作と違い、ムッツリーニ抜きのミーティングでした。

次話辺りでもう一人のオリキャラを…出せたらいいなと思ってます

（^__^；）

第6話：仕方ない、俺も動くとしますか…（前書き）

長らくお待たせして申し訳ありませんι

執筆のモチベーションがなかなか上がらず、挙げ句の果てにEエブリスタに掲載する予定の物を分けて投稿する始末…ι

なのでかなり短いですm（__）m

第6話：仕方ない、俺も動くとしますか…

秀吉「雄二。一つ気になっていたんじゃが、どうしてDクラスなんじゃ？段階を踏んでいくならEクラスじゃろうし、勝負に出るならAクラスじゃろう？」

瑞希「そういえば、確かにそうですね」

雄二「まぁな。当然考えがあってのことだ」

坂本が仰々しくうなづく。おそらく初試召戦争で勝っていきおいをつけたいのだろう。Eクラスなら楽すぎて戦争の感覚が掴めない、Dクラスなら勝てるか正直微妙…だが、戦略や戦局次第で勝つことができるはずだから今後のことを考えるとDクラスが適任といったところか

瑞希「どんな考えですか？」

雄二「色々と理由はあるんだが、とりあえずEクラスを攻めない理由は簡単だ。戦うまでもない相手だからな」

明久「え？でも僕らよりはクラスが上だよ？」

吉井の意見はもっともだ。だがFクラスは全体的な成績では劣っていても、個人の一部の成績はその者によってはAクラスをも凌駕すると言いたいのだろう

雄二「ま、振り分け試験の時点では確かに向こうが強かったかもしれないな。けど、実際のところは違う。オマエの周りにいる面子を

よく見てみろ」
明久「えーっと……」
吉井が周りを見渡してふむっと唸る。
明久「美少女二人と美幼女一人と馬鹿が二人いるね」
雄二「誰が美少女だと！？」
明久「ええっ！？雄二が美少女に反応するの！？」
おい。誰が美幼女だコラ。とははっきり言えずひたすら苦笑いしてると、おそらく（いや、確実に）吉井の中で美少女にカテゴリーされている秀吉が仲裁に入る。
秀吉「まぁまぁ。落ち着くのじゃ、代表」
雄二「そ、そうだな」
明久「いや、その前に美少女で取り乱すことに対してツッコミ入れたいんだけど」
それは同感だ。それと俺が美幼女にカテゴリーされていることに対して小一時間ほど問い詰めたいしな
雄二「ま、要するにだ」
咳払いしてから坂本が説明を再開する。オマエが美少女かどうかはスルーか。

雄二「姫路に問題のない今、正面からやり合ってもEクラスには勝てる。Aクラスが目標である以上はEクラスなんかと戦っても意味がないってことだ」

明久「？それならDクラスとは正面からぶつかると厳しいの？」

雄二「ああ。確実に勝てるとは言えないな」

明久「だったら、最初から目標のAクラスに挑もうよ」

「それだと負けると思いますが？」

雄二「ほう？柏木にもわかるか」

「はい。何事も最初が肝心なのもありますが、なんの策もなくAクラスに挑むのは自殺行為です」

雄二「ふむ。…で？柏木はどう考えているんだ？」

坂本が俺に聞き返す。…あ。つい口を挟んじまった！？目立たないように傍観者を決め込もうと思ってたのに！

雄二「柏木？」

こうなりゃヤケだ。何がなんでもAクラスに勝って豪華設備をゲットしてやる！

「…あ、すみません、ちょっと考え事してて。つまり坂本君が言いたいのは初陣を飾って、さらには策を巡らす為の布石作りをしたいと。…そんなところですね？」

気をとり直して自らの考えをいい、試すような目で坂本を見やる。
その坂本はフッと鼻で笑って好戦的な目で見返してきた

雄二「柏木の言う通りだ。今回のDクラス戦はAクラス戦に必要なプロセスということだな」

坂本が皆に視線を向けながら仰々しく語る。

瑞希「あ、あの！」

唐突に瑞希ちゃんが大きな声で話を切る。大人しい彼女にしては珍しいな

雄二「ん？どうした姫路」

瑞希「えっと、その。吉井君と坂本君は、前から試召戦争について話し合っていたんですか？」

雄二「ああ、それか。それはついさっき、姫路の為にって明久に相談されてーー」

明久「それはそうと！」

吉井がわざと大きな声を出して坂本の台詞を遮る。…ふむ。要するに吉井も瑞希ちゃんのことが好きらしいな。そして瑞希ちゃんも…。つまりは相思相愛なわけだ。お互いにオクテで進展は難しそうだが。

明久「さっきの話、Dクラスに勝てなかったら意味がないよ」

雄二「負けるわけがないさ」

笑い飛ばす坂本。奴はかなりの策士だ。すでにDクラス戦の戦略も練ってあるのだろう。さて、俺も本気を出して戦争に参加すると決めた以上は動くとするか。とりあえずは奴に接触することからだが、勇だった頃はともかく、”ユナ”としての俺を奴は知らない。…まあ、奴の情報網なら俺が女になったことも知ってそうで恐いが…さて、どうしたものか。

雄二「お前らが俺に協力してくれるなら勝てる。いいかお前ら。ウチのクラスはー最強だ」

最強かどうかは微妙であるが坂本の言葉は妙な説得力がある。奴は優れたカリスマ性もあるようだな

美波「いいわね。面白そうじゃない！」

秀吉「そうじゃな。Aクラスの連中を引きずり落としてやるかの」

「どこまでやれるかわかりませんが、やるからには協力は惜しみませんよ」

瑞希「が、頑張りますっ」

打倒Aクラス。普通なら底辺クラスであるFクラスが頂点クラスであるAクラスに勝つなんて文字通り天地がひっくり返ってもあり得ないかもしれない。でもやるからには勝ちたいと思うのは人情というものだ。

雄二「そうか。それじゃ、作戦を説明しよう」

春の伊吹の風がそよぐ屋上で、俺たちは坂本の策に耳を傾けた。

続く

第7話：奴登場。さて、どうしたものか…（前書き）

Eエブリスタに投稿した六話の後半部分です。

※見直しはしていますが文節がおかしいところがあるかもしれませんι

第7話：奴登場。さて、どうしたものか…

坂本達との作戦会議から数分後。俺はＦクラスの面々から別れて１人で行動している。奴に接触するには単独ではならないためだ。で、現在はＥクラスの前に来ている。俺は正直なところＥクラスをターゲットにしなかったことに安堵している。俺が接触しようとしている相手がいるのがＥクラスだからだ。

奴は基本的に目立つのを嫌う。それでなくとも奴は容姿の面で目立つからだ。それはーー

??「来るのを待ってたわ、柏木ゆ…ユナさん」

「Σはぅわ!?」

びびビックリしたぁ！俺が入り口付近で考えてたらいきなり真後ろから声かけてきやがるんだから！

??「あらあら、ご免なさいね、そんなに驚くとは思わなかったわ…柏木…勇クン♪」

…！こいつ、やっぱり俺のことがわかってやがる！

??「私の情報網を甘く見ては困るわね。その気になればＮＡＳＡの機密事項だって掴めるのよ？」

…奴ならできそうで超恐いが。

「さ、さすが文月学園でムッツリーニと双璧を成す情報屋…ヴァイスこと橘唯子さんですね」

そう俺が言うが相変わらずの胡散臭そうな笑みは絶やさない。情報は心理戦も含む。学生離れした情報網をもつ彼女にしたら俺の揺さぶりは蚊ほども感じてないのだろう

唯子「盗撮魔と同列扱いされるのも不遜だけど、私のことを知る一部の生徒は皆そう認識してるのだろうからまあいいわ。…で、私にご用かしら？」

相変わらずくえない奴だ。最初に「来るのを待ってたわ」と言ったくせに。もちろんそれは口に出さない。奴の機嫌を損ねても得はないからな

「…俺が来るのを知っていたなら話が早い。…もちろんあんたの持つ情報だよ」

唯子「……ここではなんだから、こちらに来なさい」

奴に促され、”新聞部”とプレートが付けられた部屋へとくる。扉の前に立ち、ブレザーの上着のポケットから鍵を取り出して開けた。

唯子「表向きは部員数が少ない弱小部だけどそれは一種の隠れ蓑。本来の目的はこの学園の情報を集めやすくする中継所と言ったところね。…とはいえ、貴重な資料があるから本当なら静脈認証やら網膜認証などのセキュリティを付けたかったけど、学園長の認可が下りなかったのよ」

そりゃそうだろうよ。たかだか一般の部活ごときにそんなコストのかかるセキュリティは付けんだろう。

……Aクラスは論外だが。

唯子「さ、どうぞ」

「し、失礼します…」

あの有名な情報屋の巣窟だと思うとかなり緊張し、思わず声がかすれてしまう。

だが室内は新聞編集用と思わしきパソコンなどの機材と生徒会室とかにありそうな長机に棚、パイプ椅子があるくらいだった。

唯子「もっと秘密研究所みたいなのを想像してた？セキュリティが平凡だからそこまで重要なのは出来ないわよ」

つまりセキュリティがしっかりしてればやったのか。恐ろしい女だ、まったく…

唯子「さて、本題に入りましょうか…柏木”ユナ”さん☆」

俺は橘に促されて奴の対面に座るとどこか楽しげな口調で切り出してきた。とりあえず俺のことは置いておくということのようだ

「…私が聞きたいのは試召戦争の相手…Dクラスの情報です」

橘が俺のことを”ユナ”と呼んだので俺も口調を変えて答える。こういう切り替えも瞬時に出来ないとボロが出るからと言うのが母さんの弁だ

唯子「なるほど…Fクラスはやはり本気で戦争するみたいね。たしかに姫路瑞希のような強力な戦力があればあるいは…」

「…もう瑞希ちゃんがＦクラスにいるのを知ってましたか。さすがは『情報屋ヴァイス』といったところですね」

唯子「…お褒めに預かり恐悦至極。といっても振り分け試験で倒れて途中退室したという目撃者の情報がありましたから。試験中の途中退室は無得点…貴女もご存じでしょう？」

俺が皮肉を込めて言うが涼しい顔をしてネタ明かしをする橘。

「それで…教えてくれるのですか？」

唯子「報酬次第…ね」

俺が単刀直入に聞くとあちらは不敵な笑みを浮かべながら答える。

「報酬…って、お金はあまりないのですが」

ちなみに柏木家のお金の管理はすべてエリス母さんが仕切っている。俺が女の子になってからはお金がかかるからと小遣いが少し増えたのだ。でも女の子としてのことでしか使うのを認められず、以前のような男らしい趣味には使うのを禁止（もしこっそり買って見つかったら没収の上にオハナシが待っている…）され、女の子としてのお金の使い方がまだよくわからないので以前よりはかなり持ってはいるのだ。

だが、こういうアングラなことの場合、ものによっては国家予算クラスの要求もあるので全然足りないだろう。

少々大袈裟かもしれないが、必要とあらばＮＡ〇Ａの機密情報まで入手できるという情報屋ヴァイスならあながちあり得ない話ではな

いのだ。

唯子「お金はいらないわ。……ただ…」

「ただ？」

唯子「貴女の身体に起こっている現象に非常に興味があるの。それを調べる為の採血させてくれれば何もいらないわ」

お金はいらないと言ったので内心ホッとしたが、次の発言でうっと唸る俺。それではまるで実験動物みたいじゃないか…

「ち、血なんてとってどうするんですか…？」

唯子「貴女の遺伝子情報やらを調べるのにアメリカにあるとある研究所に送らせてもらうわ。あ、もちろん私のコネが効く場所だから何も問題ないわよ」

コネって…本当に彼女は何者なんだろうか？

そこは触れてはいけないのかもしれない…

唯子「どうする？採血や研究所に送るための準備が必要なのですぐ採るわけではないわよ？」

「わ…わかりました。どちらにしても、私が”勇”に戻れる可能性が増えるかもしれませんし」

俺が僅かに悩んでから答えると橘は満足そうな笑みを浮かべてから一枚の紙を差し出した

「…これは？」

唯子「誓約書よ。大丈夫だとは思うけど、もし…契約をないがしろにしないとも限らないからね」

なるほど…と思いながらザッと目を通す。

※もし約定に違反した場合……それなりの措置を取らせてもらうのであしからず（場合によっては命の保証もありません）

こ、怖ええ！一体何されるか分からなくて怖ええよ！っていうか命の保証はありませんって！？

唯子「大丈夫。約定を違えなければ問題ないわ」

ニッコリと胡散臭さそうな笑みを浮かべる橘。その笑顔も怖ええよ…

とりあえずこのままだと先に進まないので、戦々恐々としながらサインする。

すると橘はおもむろに立ち上がって窓際にある、生徒会室や職員室に有りそうな棚から1つのファイルを取り出して軽く目を通したあと、数枚を抜き出して俺の前にあるテーブルに置いた

唯子「ご要望のDクラスのデータ…大体2、3日くらいの成績よ」

「こ、これが…」

なんと、その数枚の紙にはDクラスの3日前くらいのテストの成績やらがズラリと載っていた。…一番上に名前が載っているのがクラ

ス代表だろうか？【平賀源二】とある。

唯子「他にはある？ご要望とあらば弱みを握れるようなプライベートな情報もあるわよ」

「いえ、これで充分です…」

唯子「あらそう？貴女の身体の情報はそのくらいの価値はあるのだけれど」

プライベートな情報まであるというのに対してげんなりしながら答えると勿体ないと言わんばかりの表情をする橘。マジで敵に回したくない奴だ…Eクラスを対戦相手にしなくて本当に良かったと思う。

唯子「じゃあ、採血の約束はDクラス戦の後でいいわ。あり得ないと思うけど、もし私が渡した情報に齟齬があった場合は報酬はなしにしようかと思ってるから」

「え？いいんですか？」

唯子「もちろん、こちらでも調べるから嘘を言ったらわかるわよ？」

まあ当然か。というか正確無比の情報がウリの『情報屋ヴァイス』がそんなミスするとは思えんが。

唯子「ああ、そうそう。分かってるとは思うけど…」

「貴女の事を”誰にも”話すな、でしょう？分かってます」

唯子「ならいいわ」

橘が自分の存在は広めてはならないと暗に言うと俺は頷く。彼女を敵に回さない為の絶対条件だ…ちなみに1年のときにそれを話そうとしたある男子生徒が転校したそうな。

一説には消されたという噂がまことしやかにあったがそれもいつの間にかたち消えたので真相はまさに闇の中だ。

それから俺は書類を同じく橘にもらった茶封筒にしまい、新聞部の部室を出る。

さて…情報は手に入れた。後は坂本に渡して奴の作戦を見届けるとしようか。

続く

第7話：奴登場。さて、どうしたものか…（後書き）

次回は八話の前に新たなオリキャラ、唯子の紹介を掲載しようかと思います

オリキャラ紹介その2（前書き）

待望かどうかはわかりませんが、新たなオリキャラ、唯子のプロフィールです

オリキャラ紹介その２

名前：橘唯子（たちばなゆいこ）

性別：女

イメージＣＶ：川澄綾○

学年：文月学園二年Ｅクラス

身長：１６４ｃｍ

容姿：黒髪をサイドテールにして腰の辺りまで伸ばしている。瞳の色は色素薄目の黒、全体的な体型は普通だが実は文月学園随一の巨乳である。それ故に地味な印象を与えるように牛乳瓶のそこみたいな眼鏡をかけている（視力はいいので伊達メガネ）。

成績：得意教科はないが苦手教科もなく、意図的に低い点数を取れるほど点数コントロールに長けている。故に本気を出して挑めば霧島翔子を軽く上回るが、目立つのを嫌うためにわざとＥクラスに甘んじている。

性格：表向きは社交的でどこにでもいる地味な少女だが、本来は非常に狡猾で冷静な性格で、自分が不利益になることする者には全く容赦がない。反面、自分に利がある相手には協力を惜しまないので彼女のことを知る人間には非常に頼りにされている。

召喚獣：現在未確認

備考：ムッツリーニと双璧をなすと言われている凄腕の情報屋。【情報屋ヴァイス】というコードネームで呼ばれていて世界的な組織の機密情報まで手に入れることが出来ると豪語している（事実かは未確認）。両親は英国の諜報機関所属らしいが詳細は不明。目下の興味は文月学園の試験召喚システムと柏木ユナの身体情報。ちなみにムッツリーニが彼女自身（主に胸目当て）を気にしているのをどう対処するか検討中。

オリキャラ紹介その２（後書き）

次話の更新は前話よりは早くしたいと思いますι

第8話：戦争の開幕。俺の立ち位置は？（前書き）

長らくお待たせしましたぃ

エブリスタの投稿が終了しましたのですぐさまとうこうです。

こちらのはエブリスタに投稿した作品を加筆修正しております（^—^；）

第8話：戦争の開幕。俺の立ち位置は？

雄二「これをどこで手に入れた？」

Dクラス戦開始直後。ほとんどの生徒が前線と防衛ラインに向かうなか、数名の近衛部隊が残っただけの閑散とした教室内で俺は坂本に先ほど入手した書類を渡し、それに目を通した坂本が開口一番そう尋ねてきた。

「すみません、提供者の条件なんで明かせません」

雄二「……なるほど、奴か」

坂本にも面識があるようだ。今の言葉で橘の存在が分かるのは学園でもかなり限られるはずだ

それを知っているとしたら坂本も橘とある程度面識があるのだろう

「役に立ちそうですか？」

雄二「ああ、充分過ぎるくらいにな。…これなら作戦に支障はないな」

坂本は不敵な笑みを浮かべ、再び書類に目を通した後小さく呟いていた

「それはなによりです」

俺が母さん譲りの柔和な笑顔を向けると照れ臭そうに視線を逸らした

何照れてんだよ

雄二「ゴホン…！と、とりあえず柏木は本陣で待機だ。」

「わかりました」

とりあえず今回の作戦は”ある時間”まで長引かせることだからな。これ以上戦力の投入はすべきじゃないだろう

雄二「…と、そうだ。横田！」

横田「なんだ？坂本」

思い出したかのように坂本がクラスメイトの横田を呼び出す。何かの作戦か？

雄二「この伝令を中堅部隊の明久と島田に伝えてくれ」

横田「これをか？わかった」

横田は伝令を書いたメモを坂本に手渡されると足早に出ていく。クラスメイトの指定をしたということは横田は伝令役としては足が早いのだろう

「何を伝えたんですか？」

雄二「ああ、明久はバカでヘタレだし、島田は潔いからな。前線部隊が後退したとみるや撤退するかもしれん。」

ああ、なるほどね

「…つまりは作戦時間には間に合わないから何としても前線を維持しろと」

雄二「ああ、『逃げたらコロス』と伝えた」

ほんと大概に鬼だなコイツは

雄二「柏木が聡明な奴で助かる。必要最低限の提示で理解してくれるんだからな」

「ありがとうございます」

素直に礼を言うと再び照れ臭そうに視線を逸らす

…さて、俺は本陣の坂本の護衛役だ。つまりは作戦時間までは待機ということになる…つまりヒマだ

閑話休題

??「殺してやるんだからぁーっ！」

することがないのでボーッとしていると、ほどなくして相当に物騒な叫び声が近くから聞こえてきた。かなり怖いぞ、オイ

雄二「…あの声は島田か。あいつは中堅部隊の副官として明久の補佐を任せていたはずだが。何かあったのか？」

坂本が若干の呆れまじりで呟く。島田がキレるのは吉井関係で間違いないだろう

須川「代表。吉井隊長の指示で疲弊した島田副官を連れてきた」
雄二「ご苦労。前線の戦況はどうなっている？」
まるで肉食獣のような殺気を放つ島田を引きずって須川がやってくるとすぐさま坂本が戦況報告を促す
須川「かなりの劣勢だ。前線部隊は壊滅して中堅部隊と合流、その際にDクラスの清水と島田が交戦。あわや戦死の危機に陥っていたのでまだ無傷だった俺が介入してことなきを得た、というところだ」
須川が淡々とした口調で丁寧に話す。なるほど、吉井と島田は中堅部隊の隊長と副官…普通なら行動を共にするはず。ということは…
美波「吉井は助けを求めるウチを見捨てたのよ！あとで絶対に殺してやるんだから！」
…やっぱりな。というか殺しちゃダメだろ。犯罪者になりたいんかオノレは
雄二「…大体戦況はわかった。…ああ、あと須川。前線に戻るついでに先ほど入った情報を伝える。Dクラス側は数学の木内を連れ出しているらしい。」
須川「わかった、すぐに伝える」
坂本「…頼むぞ。」
須川が了承すると坂本が腕を組みながら重々しく言う。こんなところでも話術が使われているとはな

「美波ちゃん、大丈夫ですか？」

俺は未だに殺気を放ち続ける島田に恐る恐る近寄って問い掛ける。さながら動けないライオンに近寄る野うさぎのように。

美波「…大丈夫なように見える？」

「見えませんね…でも」

美波「でも…なによ？」

不機嫌な島田にゆっくり”あやす”ように語りかける

「吉井くんは助けたくても助けられなかったんじゃないですか？」

美波「…どういうことよ？」

俺は吉井のフォローをすることにした。別にあのバカに好意は持っていないが坂本の口ぶりや信頼の高さから言って、今後の試召戦争の”カギ”になるかもしれないと感じたからだ

「わたしは独自にDクラスの情報収集をしていたのですが、その流れで清水さんの情報も手にはいっていたんです。それによれば重度の【百合属性】って」

某カードをキャプチャーする魔法少女のような声色で優しく語る

「そして清水さんは美波ちゃんのことが大好きとも聞きました。普通は好きな人との逢瀬を邪魔されたら怒ると思いません？」

美波「…た、たしかに…あの時の美春の気迫は半端なかったわ」

やっぱりガチレズか

「だからですよ。昔の人も言ったでしょう？【人の恋路を邪魔する奴は馬に蹴られて死んでしまえ】って」

美波「…そ、そうね…」

今回の状況を自分に重ね合わせたのか、殺気も消失し大人しくなる。島田は基本的にいい娘なんだと思う。性格はキツめだが気さくで面倒見はいいし、料理も出来るそうだ。スタイルにコンプレックスを持っているそうだが、それも個性。俺は何も問題ないと思う

と、島田の説得が終わると同時に前線に行っていた須川が再び戻ってくる。

須川「代表。吉井隊長が時間稼ぎの為に偽情報を流して欲しいそうだ。但し対象はDクラスではなく先生たちに」

…なるほど、攪乱作戦か。吉井もバカのくせに考えてるじゃないか

須川「ただ、内容の指定はこちらに一任してもらった。代表なら効果的なものを用意してくれると思ったからな」

…やっぱただのバカだ。いままでの傾向からいって、内容の指定なしだと確実に生け贄にされるぞ。宣戦布告の使者になったときみたいに

雄二「…そうか。ちょっと待ってくれ」

坂本がおもむろに自分の席に向かいノートを切って切れ端を用意し、

シャーペンで何かを書く。それを須川に手渡した

雄二「これを放送室で読み上げてくれ。そうすれば教師たちの足止めも出来るし、Fクラスの奴らの士気も上がるはずだ」

そう言いながらニヤリと白い歯見せながら笑う。…吉井、御愁傷様。

須川「わかった、任せてくれ」

雄二「ああ、それと。それをやったあとはもう帰ってもいい。明日に備えてくれ」

そう告げながら須川の鞄を投げ渡す。須川は怪訝な表情をしていたが…多分悪鬼のように怒り狂う吉井から逃がすためだろうな

そんなやり取りを見つつ俺は何のために島田の説得をしたのかと複雑な気分になっていた

続く

第8話：戦争の開幕。俺の立ち位置は？（後書き）

エブリスタの投稿が先なのでどうしても更新が遅くなりますが、見捨てずに読んでいただければ幸いですm（__）m

第9話：Dクラス前半戦終了。吉井、いくらなんでもやりすぎ…（前書き）

長らくお待たせしましたm（__）m

今回はオリ主の心のぼやきが多めです

第9話：Dクラス前半戦終了。吉井、いくらなんでもやりすぎ…

ピンポンパンポーン♪

須川『連絡致します』

あれからほどなくして教室内のスピーカーから須川の校内放送が流れ出した

始まったか…

須川『船越先生、船越先生』

なるほど、あの船越先生か。Dクラスは先ほどの木内先生を含めて数学系の召喚エリア拡大を目的としたか…橘のデータでもDクラスのメンバーは軒並み数学の成績は高かったから…

須川『吉井明久君が体育館裏で待っています』

……あー……なるほどね。坂本の指示はこれだった…

須川『生徒と教師の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです』

……いくらなんでもやりすぎだぞ…吉井が危険だ。性的な意味で。

この放送の後に教室の外から歓声が聞こえてきた。ああ、たしかに士気があがってるようだな、この血も涙もないド外道め

雄二「ぶえっくしょい！」

生徒A「ん、坂本、風邪か？」

雄二「…いや、なんか変な電波がきた。明久ではないはずだが」

俺の罵詈雑言を察知したのか、坂本がくしゃみをしていた。その直後に須川への怨差の雄叫びを上げる吉井の声が聞こえていた

……吉井、御愁傷様…

雄二「…お前か？柏木。さっきから俺に妙な電波を送ってきてるのは」

「はい？なんの事ですか？」

なかなか勘の鋭い奴だな。だがとりあえずすっとぼけてやろう

雄二「……まあいい、そろそろ時間だ。行くぞ」

「はい」

坂本はまだ疑わしげな目をしていたが、とりあえず保留にしたようだ

それから坂本達本隊と同行して歩くこと数分。遥か前方に吉井達最前線部隊が見えてきた。ざっと見たところわずか4、5人しかいない。

先ほどの坂本立案による吉井生け贄作戦である程度士気が上がったが、それでも戦局を覆せるほどではなかったようだ

??「援軍だ！合流される前に吉井たちを全滅させろ！面倒なことになるぞ！」

あれは…塚本か？俺がまだ”勇”だった頃のクラスメイトだ、たしか。あいつDクラスだったのか

クラスメイトA「西村雄一郎、戦死！」

あ、また1人連れていかれた…残りは4人か…マズイな。こちらはまだ合流するのに時間がかかる…間に合うか…？

次々戦死するクラスメイトたち。ついには隊長である吉井も召喚を始めた

明久「試獣召喚（サモン）！」

遂に吉井が召喚獣を召喚した。

明久「Fクラス中堅部隊隊長、吉井明久。貴公の相手をーーあがぁっ！」

召喚獣の出現位置が悪く、突撃してきた敵召喚獣に吉井の召喚獣がはね飛ばされた…その際にフィードバックのせいで吉井自身もダメージを受ける…あれ危ないよな…召喚獣が首をはねられたらどうなるのだろうか…いや、考えないでおこう

それからは相手が吉井を侮ったのか吉井の相手は1人になった。だが吉井は召喚獣の操作が慣れているのか相手を軽くあしらう。

明久「ああっ！霧島さんのスカートが捲れているっ！」

『なにぃっ！？』

唐突な吉井の狂言にＤクラスの男子とＦクラスの男子だけでなくＤクラスの女子まで振り返る

その振り返った女子は皆そっち趣味か。

それから吉井はその一瞬の隙を見計らってすぐ近くの窓に思いっきり上靴を投げつけた

ガシャァァン！

破砕音とともに窓が砕け散る…坂本もそうだったが、バカなせいか後先を全く考えてないよな…

『な、なんだ！？なにごとだ！？』

その音にその場にいた全員の注意が逸れる。当然俺がいる本隊には影響がない…というかここからだと吉井の奇行がよく伺えた。

明久「うわっ！島田さん！そんな物をどうする気だよ！」

そこで島田のせいにするのか…吉井が妙な演技をしながら消火器を掴み取って安全弁を引き抜く…って、オイ。

ブシャァァッ！

小気味いい音とともに吉井は辺りに消火器を放出する。…時間稼ぎなんだろうが、これは相当な大惨事だ。大丈夫か？いろんな意味で

生徒Ａ「う、うわっ！なんだ！？」

生徒B「ぺっぺっ！こりゃ消火器の粉じゃねぇか！」

生徒C「前が見えない！」

吉井の辺りが消火器の粉で真っ白になる…もうなんというか、滅茶苦茶だ

明久「島田さん、キミはなんてことを！」

吉井がさらに島田に濡れ衣を着せる発言をする。……殺されるな、こりゃ。

生徒A「Fクラスの島田め！なんて卑怯な奴なんだ！」

生徒B「許せねぇ！彼女にしたくない女子ランキングに載せてやるからな！」

生徒C「そうだ！在学中には彼氏のできない状況にしてやる！」

女子生徒A「……でも男らしくてステキ……。お姉さま……」

……全殺しされなきゃいいけど…と、やはり彼女は同性にモテるみたいだな…

と、いきなり吉井が振り返ってこちらを見る。何かやり遂げた表情をしている…なんかムカつくな、コイツ。

明久「だぁぁぁっ！」

それから再び前方を向いた吉井が空になった消火器を天井のスプリ

ンクラーに向けて投げつける……なんだか頭痛くなってきた…

シュワァァァーー

吉井が投げた消火器がスプリンクラーに命中して作動し、先程まで舞っていた粉を洗い流す。……確実に器物破損の罪だよな、吉井の奴…

近藤「待たせたな、吉井！五十嵐先生！Ｆクラス、近藤吉宗が行きます！」

吉井の時間稼ぎのおかげで坂本率いる本隊が到着し、その１人の近藤がＤクラスの残存部隊に襲いかかる

塚本「くっ！ここは退くぞ！全員遅れるな！」

敵部隊の隊長である塚本が撤退命令を下す。まあ賢明な判断だな

雄二「深追いはするな。俺たちも明久の部隊を回収したら一旦戻るぞ」

坂本も撤退命令を下す。今深追いしても相手の本隊が出てくるだろうしな…Ｆクラスで対抗できる戦力も他にないし…何より今回の戦いは今後の策の布石に過ぎないからな

雄二「さて、無事なようだな。明久」

明久「うん、まぁね」

滅茶苦茶な窮地の脱し方だったがな…

それから俺達は生き残った部隊を連れて本拠地である、Ｆクラスに帰還した。

…やれやれ、わかってはいたがこんなにギリギリな戦いばかりなのかね…

続く

第１０話：Ｄクラス戦後半。俺の出番はあるのかね？（前書き）

大変長らくお待たせして申し訳ありませんｍ（　）ｍ

第１０話：Ｄクラス戦後半。俺の出番はあるのかね？

教室に戻った俺達はそれぞれに回復テストを受けていた…といっても俺は戦闘はしていないから総合力の上乗せだ。

というのも俺は特に得意な科目はない。そのかわり苦手な科目もないが…要するに”最大の武器”になりうる科目がないのが俺の欠点だ。なので総合力で勝負出来るようにまんべんなく一通りの科目をこなした

雄二「明久、よくやった」

と、坂本が珍しく吉井を褒める。そして物凄い笑顔だった。それはもう殴りたくなるくらいに。

……ああ、そうか。こいつ…

明久「校内放送、聞こえてた？」

雄二「ああ。バッチリな」

…やっぱりな。そして吉井の顔が一瞬驚愕の表情になり、怒りの形相になる。…でも襲いかかる気配はない。そりゃそうだ、奴の怒りは須川に向いてるんだし

明久「雄二、須川君がどこにいるか知らない？」

ほらやっぱり。顔はいつもの表情に戻っているが目が笑っていない。つまりは彼の心の内は須川への復讐でいっぱいって感じだ

…本当の黒幕が目の前にいるんだけどな。

……吉井に教えたらどんな反応するだろう。…ちょっと面白いかも…

雄二「もうすぐ戻ってくるんじゃないか？」

嘘つくな。先ほど校内放送かけたらすぐ帰れと言ったろうに。

吉井はまるで初陣の兵士のような表情をして制服のポケットの膨らみに触れる。

…もしかして凶器？…坂本もそうだが、吉井もそうとうにアレだな。

バカだから仕方ないか

…と、ふと視線を感じてそちらに目を向けるとどこか餌をねだる子犬みたいな目をしながら秀吉が見ていた

「木下君？どうしました？」

秀吉「え、あ、いや…ワシは別になにも」

唐突に声をかけられたために慌てた表情をする。…ああ、なるほどね

「木下君、前線部隊の任務お疲れさま。無事に戻ってこられたようでなによりです」

俺はいつものように某カードをキャプターする花の名前の少女似の声で労う。すると秀吉はさらに真っ赤になった

フフフ、効果テキメンだ

秀吉「う、うむ、でもワシはあまり活躍しておらぬよ。最後には明久に助けられたしな…」

鬼畜な策でな。

「ご謙遜を。前線部隊が予想よりもったのは木下君が士気を上げてくれていたからですよ？」

秀吉「そうかのう…？」

これは嘘だ。坂本の予測ではあと数分はもつことになっていた。…まあ、その辺当たりはDクラスの士気が高かったからだろう。

明久「シャァァァアッ！」

唐突に吉井が奇声を上げながら坂本に襲いかかる。あ、秀吉と話してたせいで吉井に教え損ねた。…何を考えているのか坂本自身が暴露したらしい。…ちっ

雄二「あ、船越先生」

と、言うと同時に吉井が辺りの卓袱台を蹴散らして掃除用具入れに逃げ込む。反応早ええな、オイ

雄二「さて、馬鹿は放って「吉井くん、船越先生はきてないですよ♪」あ、柏木！？オイ！」

坂本が吉井を放置していこうとしていたので本当のことを呼び掛け

る。ド外道は地獄に堕ちろ。フフフ

明久「……」

雄二「ちぃ！」

俺の声に反応して吉井が掃除用具入れの扉の隙間から覗くと同時に坂本が逃げるようにして教室を飛び出した

秀吉「……柏木も存外残酷じゃの…」

「私はズルいのがキライなだけですよ」

秀吉がどこか悲しげな目で俺を見る。フフフ、これで俺への恋愛フラグは折れただろう。まさに一石二鳥だ

明久「逃がすか、雄二ぃっ！」

吉井が掃除用具入れの扉を蹴り開けて物凄いスピードで坂本を追跡しに飛び出した

さてと、俺も行くか。

何故か俺の後を悲しげな目のまま、秀吉が付いてきていた。……フラグ、折ったはず、だよな？

渡り廊下に到着すると既に両軍の混戦が始まっていた。

俺はというと、この小学生並みの小柄な体躯のせいで下校中の生徒でごったがえした人ごみにもまれて（胸はもまれてないぞ。これ重要）、上手く前に進めなかった。それでもさほど時間がかからなか

ったのは、後ろから付いてきていた秀吉のおかげかもしれない

雄二「下校している連中にうまく溶け込め！取り囲んで多対一の状況を作るんだ！」

坂本はどうやらまだ健在のようだ。まあ、変なことには頭が回るみたいだからな

クラスメイトA「そっちから回り込め！俺はコイツに数学勝負を申し込む！」

クラスメイトB「なら俺は古典勝負をーー」

クラスメイトC「日本史でーー」

坂本の指示どおり上手く人ごみを利用して多対一の状況を作り出している。…さて、俺はどうするか…

俺は一応転校生という位置のせいか、まだFクラスメンバーと把握されていない。それを利用しての奇襲か、それともギリギリまで存在を伏せておくか…だな。……決めた。今回は参加せず、傍観者に徹しさせていただくとしよう

おそらくは俺も（自慢するわけではないが）瑞希ちゃん…姫路さんに次ぐ、Fクラスの切り札になるだろう。

坂本のプランはわからないが、このあといきなりAクラスには挑まないはずだ。あくまで予想だが…あと2、3戦はすると思う。したがって序盤のこの戦いから手の内を見せすぎるのは得策ではない…

『Dクラス塚本、討ち取ったり！』

…と、思考の波に入っている間に塚本が討ち取られたようだ。もうそろそろ決着か？

明久「雄二、どこだ！」

吉井の怒声が聞こえてくる。やはりこの人ごみでは見つけられないようだ。だが坂本の身長なら見つかるのも時間の問題だな…

??「援護に来たぞ！もう大丈夫だ！皆、落ち着いて取り囲まれないように周囲を見て動け！」

…おっと。ついに敵クラスの代表さまのお目見えか。総力戦ってところだな

平賀「本隊の半分はFクラス代表坂本雄二を獲りに行け！他のメンバーは囲まれている奴を助けるんだ！」

『おおー！』

代表の平賀の号令であっという間に坂本の周りがDクラスメンバーで囲まれる。秀吉「まずい状況じゃの…って、柏木は何故に隅っこにおるのじゃ？」

「巻き込まれないためですよ」

黙って戦況を見ていた秀吉が問いかけたので簡潔に答える。今も坂本の低い声質ながらもよく通る声で撤退の指示が出る。…ということはもうそろそろか？

秀吉「助けぬのか？雄二がまずい状況なのじゃが」

「坂本くんのプランが生きているのなら、私が動く必要はないですよ」

布石は揃っている。あとは時間との勝負だ

秀吉「大丈夫かのぅ…」

心配げな表情で囲まれている坂本を見ている秀吉（彼は先ほどの前哨戦で消耗してるから戦闘に参加しないように坂本から指示されている）をよそに周りを見回すと吉井が「チャンスっ！」の言葉とともにDクラス代表の平賀に向かって駆け出した。

明久「向井先生！Fクラス吉井がーー」

Dクラス生徒「Dクラス玉野美紀、試獣召喚（サモン）」

明久「なっ！近衛部隊！？」

驚愕する吉井…ふむ。

平賀「残念だったな、船越先生の彼氏クン？」

ある程度離れているが、勝ち誇っているような声が聞こえた。…上手く罠に掛けたようだが、吉井はああ見えて狡猾な奴だ。何かしら手を打っているはず……たぶん。

明久「ち、違う！アレは雄二が勝手に」

平賀「そんなに照れなくてもいいじゃないか。さ、玉野さん。彼に祝福を」

玉野「わかりました」

玉野と呼ばれた女性徒が吉井にゆっくり近づく。そして俺の視界の隅に見覚えのあるピンク色の髪が見えた。

…どうやら間に合ったみたいだな。

明久「ちくしょう！あと一歩でDクラスを僕の手で落とせるのに！」

平賀「何を言うかと思えば、彼氏クン。いくら防御が薄く見えても、さすがにFクラスの人間が近づいたら近衛部隊が来るに決まっているだろう？ま、近衛部隊がいなくてもお前じゃ無理だろうけど」

平賀が悪の親玉の如くフンッと鼻を鳴らして吉井を一瞥した。ま、その余裕もそこまでだな。奴はここに来た時点で坂本の術中にハマっているのだから

奴の言葉に吉井は一瞬ムッとした表情をするが、何故か格好つけて片目をつむりながら応えた

明久「それは同感。確かに僕には無理だろうね。だからーーー」

吉井はわざと間をとる。そしてFクラス”最強”の切り札が平賀の後ろから近寄る。

明久「姫路さん、よろしくね」

平賀「は？」

『何を言っているんだ、この馬鹿は？』と言わんばかりの声をあげる。まあ、普通はあり得ないと思うわな。

瑞希「あ、あの……」

そんな奴の後ろに近寄っていた瑞希ちゃん…姫路が申し訳なさそうに肩を叩く。…なるほど、あんな仕草も勉強に…って、またか俺は！

平賀「え？あ、姫路さん。どうしたの？Ａクラスはこの廊下は通らなかったと思うけど」

完全に呆気にとられている平賀。まあ、彼女がＦクラスだなんてこの学園の生徒なら誰も思わないだろうからな

姫路「いえ、そうじゃなくて……」

言いづらそうに身体を小さくする姫路。……Σはっ！？また仕草の勉強をしてしまった！くそう、母さんとの特訓のせいで知らず知らずのうちに”女の子らしく”しようとしている！？

瑞希「ご、ごめんなさいっ」

ハッと我に返ると姫路と平賀は既に召喚獣を喚び出していてその次の瞬間には姫路の召喚獣が巨大な剣を身体ごと縦回転させて一撃で平賀の召喚獣を葬りさった。

肝心な場面を見損ねたが、クラス代表平賀の戦死でＤクラス戦は終結を迎えたのだった

続く

第１０話：Ｄクラス戦後半。俺の出番はあるのかね？（後書き）

楽しみにして下さっていた方に大変申し訳なく思いますぃ

言い訳させていただきますと、最近は仕事がにわかに忙しくなり、その疲れから執筆意欲が著しく減少、休日にほんの僅かながらすすめていた次第ですぃ

ここ数日はようやく今の現状になれ、こうして更新が完了しましたぃ

相変わらず更新の遅い駄作ではありますが、懲りずに読んでいただければ幸いですｍ（＿＿）ｍ

第１１話：Ｄクラス戦終了…濃い１日だった…（しみじみ）（前書き）

かなり久し振りの投稿です。

すみませんｍ（＿＿）ｍ

第１１話：Ｄクラス戦終了…濃い１日だった…（しみじみ）

Ｄクラス代表　平賀源二　討死

『うぉぉーーっ！』

その報せを聞いたＦクラスの勝鬨とＤクラスの悲鳴が混ざり、耳をつんざくような大音響が校舎内を駆け巡った。

…気持ちはわかるがとりあえずもちつけ

クラスメイトＡ「凄ぇよ！本当にＤクラスに勝てるなんて！」

クラスメイトＢ「これで畳や卓袱台ともおさらばだな！」

クラスメイトＣ「ああ。アレはＤクラスの連中の物になるからな」

クラスメイトＡ「坂本雄二サマサマだな！」

だが鬼畜だぞ？

クラスメイトＤ「坂本万歳！」

クラスメイトＦ「姫路さん愛してます！」

クラスメイトＥ「ユナちゃん妹になってくれ！」

絶対嫌だ

…代表である坂本を褒め称える声がいたるところから聞こえてきた。さっきまで坂本がいた方を見ると、がっくりとうなだれているDクラス生徒たちの奥でFクラスの皆に囲まれている姿があった。

秀吉「お疲れさまじゃの、柏木」

「わたしは何もしてないですよ」

再び近寄ってきた秀吉に苦笑で答える。

秀吉「じゃが、おぬしがいたおかげで雄二のやつもやり易かったんじゃないかの？」

「まさか。わたしは彼の傍に居たにすぎませんよ？」

……気のせいか？背後から物凄い殺気が感じたが…

秀吉「どうしたのじゃ？」

「いえ、なんでもありません」

秀吉の言葉に再び苦笑いする。…さっきのはなんだったのだろうか？何故か坂本の話題を出した時に感じたような…

明久「ぐあっ！」

カシャン…

唐突に吉井が奇声上げると同時に金属音。また何かやらかしたのか

と視線を向けると坂本が吉井の手首を捻りあげており、足元に包丁が転がっていた。

……オイオイ、いくらなんでも障害沙汰は勘弁してくれよ…

雄二「……」

明久「雄二、皆で何かをやり遂げるって、素晴らしいね」

雄二「……」

当然坂本は無言

明久「僕、仲間との達成感がこんなにもいいものだなんて、今まで知らな関節が折れるように痛いぃっ！」

吉井が良いことを語る途中で坂本が馬鹿力で吉井の手首が折れるんじゃないかというくらいに捻りあげる。

雄二「今、何をしようとした」

明久「も、もちろん、喜びを分かち合うための握手を手首がもげるほどに痛いぃっ！」

吉井の返答に坂本がさらに馬鹿力で吉井の手首を捻る。自業自得だ。いくら策ではめられたからといって、刃物での仕返しはやりすぎだと思う。

雄二「……ブツブツ……」

坂本が何かを呟いている気がしたが、ろくでもないことだろうと思

ったので敢えてスルーする

平賀「まさか姫路さんがFクラスだなんて……信じられん」

吉井と坂本の後方から平賀がヨタヨタと歩み寄る。その声に気づき2人は振り返った

瑞希「あ、その、さっきはすいません……」

坂本達から向かって右側から姫路も駆け寄ってくる

平賀「いや、謝ることはない。全てはFクラスを甘く見ていた俺達が悪いんだ」

学生同士の争いとはいえ、試召戦争は”戦争”だ。戦争に卑怯もなにもない。

それに…平賀は甘く見ていたとは言うがちゃんとした情報がなく、相手は格下…なのに、そんな中でいきなり全軍で総攻撃するわけではなく前線部隊と本隊に分けていたのだから充分慎重だったと俺は思う。

今回は逆にその慎重さが明暗を分けたのだと俺は考察する。…もしも平賀がFクラス（こちら）を舐めきっていきなり全軍で総攻撃してきたら姫路の補給が間に合わずにやられていただろう。

雄二「いや、その必要はない」

俺が色々考えているうちに話しは進んでいたようだ。多分、教室の明け渡しについてだろう。

明久「え？なんで？」

雄二「Ｄクラスを奪う気はないからだ」

それが当然であるかのように告げる坂本。それに不思議そうな顔をする吉井。

坂本のことだ、目標はＡクラスなのにＤクラスの教室を手に入れてしまったらそれに満足して戦争続行を反対する奴らが出るのを危惧しているんだろう

明久「雄二、それはどういうこと？折角（せっかく）普通の設備を手に入れることができたのに」

雄二「忘れたのか？俺達の目標はあくまでもＡクラスのはずだろう？」

確かにＡクラスの設備は欲しいがな。

明久「でもそれならなんで標的をＡクラスにしないのさ。おかしいじゃないか」

…確かに吉井の言う通りだが、普通に攻めても負けるのは目に見えているが。

坂本のことだから、今回の一戦もＡクラス戦への布石なんだろう

雄二「少しは自分で考えろ。そんなんだから、お前は近所の中学生に『馬鹿なお兄ちゃん』なんて愛称をつけられるんだ」

明久「なっ！そんな半端にリアルな嘘をつかないでよ！」

雄二「おっとすまない。近所の小学生だったか」

んなばかな。いくら吉井でもそれは…

明久「……人違いです」

なん…だと…？

雄二「まさか……本当に言われたことがあるのか……？」

なるほど…吉井のバカ認知度はご近所に有名なのか…

雄二「と、とにかくだな。Dクラスの設備には一切手を出すつもりはない」

平賀「それは俺達にはありがたいが……。それでいいのか？」

雄二「もちろん条件がある」

平賀のややホッとした表情で尋ねると坂本は偉そうに腕を組みつつ答える。

まあそうだろうな、じゃないと戦争を仕掛けた意味がない

平賀「一応聞かせてもらおうか」

雄二「なに。そんなに大したことじゃない。俺が指示を出したら、窓の外にあるアレを動かなくしてもらいたい。それだけだ」

坂本が指したのはDクラスの窓の外に設置されているエアコンの室外機。
だが、この室外機はDクラスのものではない。

平賀「Bクラスの室外機か」

雄二「設備を壊すんだから、当然教師にある程度睨まれる可能性もあるとは思うが、そう悪い取引じゃないだろう？」

そりゃそうだ。設備を壊すくらいならバレれば厳重注意、最悪でも何日かの補習程度で済む。劣悪なFクラスの教室で最低3ヶ月間過ごすよりも遥かにましなはずだ

平賀「それはこちらとしては願ってもない提案だが、なぜそんなことを？」
なにも知らない平賀は不思議そうな顔をする。…ふむ、つまり次の相手はBクラスか。あとで唯子から情報を仕入れなくてはな

雄二「次のBクラス戦の作戦に必要なんでな」

平賀「……そうか。ではこちらはありがたくその提案を呑ませて貰おう」

雄二「タイミングについては後日詳しく話す。今日はもう行っていいぞ」

平賀「ああ。ありがとう。お前らがAクラスに勝てるよう願っているよ」

平賀が爽やかに笑う。嘘つけ、ただの社交辞令だろ

直後に皮肉を言う坂本にニヒルに笑い、じゃあと手を挙げてDクラス代表の平賀は去っていった。

雄二「さて、皆！今日はご苦労だった！明日は消費した点数の補給を行うから、今日のところは帰ってゆっくりと休んでくれ！解散！」

坂本が号令をかけると、皆雑談を交えつつ自分のクラスへと向かい始めた。

秀吉「柏木。ワシらも参ろうか」

「あ、はい」

坂本に声をかける吉井を何気なく眺めていると再び秀吉が声をかけてきた。俺は秀吉のフラグを折ったはずだが…

実はばっきばきに立ってる？

続く

第１２話：転校初日終了。…密度が濃すぎる…（前書き）

久し振りの投稿です。これからは少しづつストックを作りながら投稿していきたいと思いますｍ（＿）ｍ

第１２話：転校初日終了。…密度が濃すぎる…

俺と秀吉で連れ立って教室に向かう。吉井と坂本は姫路に呼び止められたので、２人で教室に向かっているわけだ

秀吉「のう、柏木」

「なんですか？」

秀吉「よ、よかったらなんじゃが…ワシと一緒に帰らないかの？」

「え？」

秀吉の突然の申し出にポカンとする。

何？やっぱりばっきばきにフラグが立ってんの？

秀吉「ダメ…かの？」

俺が色々悩んでいるのを否定と見たのか、しゅん…としつつ再度聞いてきた

「別に構いませんが…」

秀吉「そうか！いや、柏木はワシのことが嫌いなのかと思ってしまったぞい」

俺の返答にホッとしたような笑顔を向ける。ホント見た目は女そのものだな…

あ、秀吉はいわゆる”男の娘”ってやつか。

それから教室に戻って帰る支度を済ませた俺達に島田が声をかけてきた

美波「ユナ、木ノ下。吉井知らない？」

秀吉「明久なら雄二とともに姫路に呼び止められてたぞい」

「吉井君に何か用事ですか？」

まあ、島田のことだから吉井と一緒に帰ろうだとかそんなとこだろう。

美波「……（瑞希…まさか抜け駆けしようってわけじゃないわよね…？）ありがと、じゃあウチはいくわね！」

俺達に聞こえないような小声で呟いたあとに力強い笑顔を振り撒きながら走り去っていった

・

・

・

秀吉「明久も大概人気者じゃのぅ」

「そうなんですか？」

秀吉と並んで歩く帰り道、何気なく呟いた彼の言葉に小首を傾げて

聞き返す。

秀吉「うむ。奴の回りには何故か人が集まるでな、まあワシもその1人なんじゃが」

「はぁ」

特に感慨もなく生返事で相槌を打つ。

秀吉「そういえば柏木はこの学園に慣れたかの？」

「1日で慣れるわけないですよ」

少なくともこの姿ではまだ慣れてない…慣れたくもないが。

秀吉「そういえばそうじゃのう。新学期、柏木の転入、Dクラス戦…と1日で色々ありすぎたからのう」

濃度が濃すぎだ

秀吉「じゃが明日は回復試験だけじゃし、今日ほど忙しくないと思うぞい」

だといいけどね

？？「こんな所にいた！ちょっと秀吉！」

「「？」」

後方からのいきなりな呼びかけで俺と秀吉は同時に振り返る

秀吉「あ、姉上！？」

声をかけた相手を見て秀吉が目を見開く。

声をかけたのは秀吉の姉、木ノ下優子だった

優子「ちょっと！夕飯の買い物は済んだの？こんなとこで油売ってんじゃないわよ！」

木ノ下が凄い剣幕で秀吉に詰め寄る。おお、本当にそっくりだな。…双子だから当然だが

秀吉「むぅ…あれは姉上が頼まれたのでは？」

優子「アンタよ！あたしじゃないわ！」

木ノ下の剣幕に秀吉はタジタジになる。それから申し分けなさげな表情で俺に向き直った

秀吉「すまんのぅ、柏木。ワシはどうやら買い物に行かないといけないから一緒には帰れないようじゃ」

「用事があるなら仕方ないですよ。それではまた明日」

秀吉「うむ、ではの」

秀吉に軽くお辞儀してから立ち去る。後ろで木ノ下が「あの娘ってアンタの彼女？」だとか言って秀吉をからかっていたが無視だ

・

・　・　・
それからは何事もなく家路に…着きたかったが、秀吉と別れてからDクラス戦後に感じた妙な視線を再び感じ始めた

「……いるのはわかっているんですよ？私に言いたいことがあるのでは？」

俺は立ち止まって視線を向けずに言い放つ。すると予想通り靴音が鳴って俺の近くで音が止んだ

「貴女は…」

振り返って視線の主を見るとあの学年主席の霧島翔子が無表情で佇んでいた

翔子「……」

俺を無表情で見る霧島翔子。男子に人気があるその端正な顔立ちで直視されると正直かなり怖い

翔子「…貴女は誰。…雄二とどういう関係なの？」

霧島は無表情な顔を崩さぬまま淡々と聞いてきた

「はい？」

翔子「……答えて。」

霧島が無表情で俺を見据える。背後には母さんばりのどす黒いオーラを放っていた

「ひぃ！？」

俺は霧島のオーラを見て母さんとの地獄の特訓が頭をよぎり、へなへなと腰が抜けてしまう（しかも女の子座り）所謂トラウマってやつだ

翔子「…？大丈夫…？」

突然怯え始めた俺を無表情ながらも心配げに見つめてきた

翔子ｓｉｄｅ

突然目の前の中学生くらいに見える外国人少女が瞳を潤ませてへたり込む。

いったいどうしたのだろう？隠れて観察していた私を見破った燐とした雰囲気はすっかり霧散し、そこにはまるで仔犬のように怯える年相応…かどうかはわからないけど普通の少女になっていた

ちょっと萌えちゃった。

…それから私は未だに震え続ける（小声でごめんなさいお母様と呟いていた。意味不明…）彼女を引っ張り起こして、子供をあやすよ

うに優しく抱き締めた。

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

…なぜこうなった？

俺は母さんに課せられた地獄のミッションが幻覚だったことに気づき、我に返ると…

何故か無表情ながらも慈愛に満ちた雰囲気の霧島翔子に抱き締められていた。

…なぜこうなった？

大事なことなので二回言って（思って）みた

「…あの～…」

翔子「……落ち着いた？」

おずおずと声をかけると霧島翔子がゆっくり離れた

「え～と…ありがとうございます？」

翔子「…どういたしまして」

とりあえずお礼を言うと無表情ながらも頬を赤く染めた状態で答えてきた

翔子「…話を最初に戻すけど…雄二とはどういう関係？」

落ち着いたのがわかると先程よりは心なしか柔らかな雰囲気でもう一度尋ねてきた。

「…関係もなにも、私は今日転校して来たばかりで…坂本君とはただのクラスメイトですが」

翔子「…本当に…？」

先程よりも柔らかながらも訝しげな雰囲気で聞き返してきたので深く頷く

翔子「……わかった、信じる」

信用してくれたのか僅かに感じていた重い雰囲気が霧散する。それにしても…霧島翔子の威圧をくらって母さんとのトラウマ…じゃない、特訓を思い出させるとは…霧島翔子おそるべし

翔子「…でも。雄二に手を出したら許さないから」

「ひぃ！」

霧散した威圧感を再び発しながらボソリと呟いた。

かなり怖い、チビりそうです

俺を立ち上がらせた後、返事を待たずに霧島翔子はゆっくりとした足どりで去っていった。才女の考えは訳わからないな…

??「お?」

「ん?」

それからしばらく家路への道を辿っていると我が愚弟とエンカウントした

祐二「姉ちゃんも今帰りか?」

「見りゃわかるだろ。それと…誰が姉ちゃんだ!」

愚弟の問いかけに力一杯反論する。まったく、何度言ってもわからん奴だな

祐二「いやだって姉さんって容姿じゃないし、俺よりちっさいし」

「誰がミジンコ並みの背丈だゴラァ!」

祐二「いやそこまで言ってないし」

…と、どこぞの鉄腕アルケミストな反論をしながら2人で家路につく。ちなみに俺は愚弟の腰くらいまでの背丈しかない…こいつと並ぶと嫌がおうにも女性化したのを痛感する

祐二「ところで姉ちゃんよぉ」

「誰が姉ちゃんだ。…何だ?」

とりあえず祐二の問いかけに反論する。奴は姉ちゃん呼びを変える

気はないらしい…実に困ったものだ

祐二「”姉ちゃん”としての学園生活はどうだった？」

「姉ちゃんじゃねえと言ってるだろ。…とりあえず、１つ言えることはだ」

祐二「言えることは？」

「クラスメイトみんな”バカ”だな」

祐二の質問に思いっきり間を空けて答える。まあ、姫路さんは巻き込まれただけだから別だな

祐二「バカって…一刀両断だな…」

「事実だよ。新学期初日から試召戦争やらかしたからな」

祐二「試召戦争って…あの文月ならではの試験召喚獣を使ったやつ？」

祐二の質問に深く頷く。俺のリアクションに呆れた表情をしていた。まあ、普通はそう思うわな

・・・・

それから家に着き、ドアを開けた途端にオヤジが襲ってきたがいつ

の間にか背後に佇んでいた母さんに捕まって連れていかれた

多分また”オハナシ”だろう…オヤジも懲りないな…

・

・　・　・

「……なんじゃこりゃあ…」

制服から着替えるために自室に向かい、ドアを開くと

部屋一面ファンシーな空間が広がっていた。思わずどこぞの刑事みたいな台詞が出てしまうくらい朝とはガラリと変貌していた

花柄のカーテン。ベットなど随所に置かれた動物のヌイグルミ（普通に可愛いのに混じってどこかで見たことのある腹をアレした黒いウサギのヌイグルミもあった。なぜに…）。ドレッサー…挙げればきりのないくらいこれでもか！といわんばかりに少女な部屋になっていた

「……」

とりあえず枕元に鎮座したアレな黒ウサギをゴミ箱に投げ捨て、ピンクの水玉模様な掛け布団のベットに倒れこんで仰向けになる。

「ふぅ……やっと一日目終了か。長かったな…」

ポツリと呟き天井を眺める。母さんも流石に変える気はなかったようで天井は何も変わってなかった。

「いつまで女の子のままなのかな…」

右手を天井にかざす。子供のような細く小さい手が自分が嫌がおうにも女の子なのだと自覚させられた

「…このまま戻れなかったら…」

いつか男と恋愛するのだろうか…嫌だなそれは。それならいっそ見た目が女の子みたいな秀吉と…って、何考えてるんだ俺は！まだ戻れないと決まったわけじゃないじゃないか！

足を振り上げて勢いつけて起きあがり軽く両頬を叩く。

「さて…着替えるか」

そのまま立ち上がり、クローゼットを開く。

「……予想はしてたけどな…」

クローゼットの中は色とりどりの”女物”の洋服が所狭しと並んでいた。当然ズボンなどの男物は存在していない。ついでに言えば何故かゴスロリ調のフリフリが付いた服ばかりになっていた

「……はぁ…」

半ば諦めとやけくそ気味になりつつ黒を基調としたゴスロリ服を選

び、着たままだったブレザーの上着を脱いでブラウスも脱ぐ。

祐二「姉ちゃんそろそろ夕は…」

「ん？」

ブラも着替えるかと思ってワイヤーに手を掛けた直後、我が愚弟が部屋をドアを開きそのままの状態で固まった

「もうそんな時間か。着替えたらい「ご、ごめん！」え、ちょ」

俺が言い終わるより先に慌てて出ていった

「なんなんだ、あいつ…」

軽く首を傾げ着替えを再開した。

・・・・・・

それから何故か目を合わせようとしない愚弟を不思議に思いつつ、柏木ユナとしての学園生活初日が終わりをむかえたのだった

続く

第１３話：なにげに秀吉との絡みが多い気がする…（前書き）

Ｅエブリスタの掲載分だと長くなるので半分に分けました。

第13話：なにげに秀吉との絡みが多い気がする…

「……ん…」

携帯のアラームで目を覚ます。まだボーッとする頭を軽く掻きむしると指先にサラサラとした質感を感じた

言うまでもなく俺の髪の毛だ。どうやら今日も今日とて女の子のままらしい…まあ、そう簡単には戻らないか

「……うしっ」

軽く気合いを入れて強引に寝ぼけた脳を覚醒させ、ベットから下りる。それから制服と替えの下着を用意してから部屋を出た

男の時から朝起きたら軽くシャワーを浴びる習慣にしているので、母さんから「朝シャンは女たしなみよ♪」と言われても微妙な違和感を感じてしまった…朝シャンは男もする奴はいるだろうに。

・

・

・

・

「ふぅ…さっぱりした」

たっぷりと時間をかけてから脱衣場に戻る。髪が長いから洗髪にどうしても時間がかかるからだ。本当は短くしたいのだが、家族全員（愚弟にまで反対された。なぜに…）が反対し、何故か自分自身も「このままでいいか…」という気分になってしまったから結局この

長さで落ち着いている。

「髪型でも変えてみるかな…」

この容姿ならツインテールも似合うかもしれない。なんて考えながら何気なく入り口に視線を向けると

祐二「……」

我が愚弟が寝間着姿で固まっていた

「おはよう、祐二。風呂使うなら空いたぞ」

祐二「……ご」

「ご？「ごめん！」ちょ、またか？！」

固まっていた愚弟に声をかけると昨日と同じく慌てて出ていった

「なんなんだ…あいつ」

？？？「あらあら…ユナちゃんったら…」

「母さん？」

いつの間に来たのか、偉大なるお母様が後ろに立っていた

エリス「ユナちゃん？貴女には恥じらいというものが欠けているみたいね☆」

い、嫌な予感…あ。確かに今の俺はバスタオルを首に引っ掛けただけで何も身に付けていなかった

エリス「気が付いたみたいね♪…でも」

「ひぃ！？」

霧島翔子の比じゃないくらい強烈な威圧感を放つお母様に俺は再びトラウマを発動させられたのであった。

・　・　・　・　・

「よし…こんなものか」

あれから小一時間ほど（あくまで体感時間。実際は5分くらい）母さんのオハナシをくらい、ますます顔を合わせなくなった祐二に苦笑い浮かべ、朝から過剰なスキンシップをしようとするオヤジ殿に蹴りを入れてから昼飯の弁当を作る。

ちなみにおかずは定番のタコさんウインナーに玉子焼き、ミニハンバーグにマカロニサラダといったごく普通のラインナップだ。もう少し時間が取れれば手の込んだおかずが用意でき…

「…はっ！？いつの間にか主婦的な思考に？！」

無意識のうちに鼻歌を歌いながら弁当の準備をしていた自分に鬱になる…段々女の子化していく様に戦慄した瞬間だった

・　・

・
・
秀吉「おはよう、柏木」
「おはようございます、木ノ下君」
あれから手早く準備して家を出たが、結局遅くもなく早くもない微妙な時間になった。朝から注目を浴びる自分に半ば諦めの精神で登校していると相変わらずの男の娘っぷりを発揮する木ノ下秀吉とエンカウントした。
秀吉「今日は2つに纏めてるんじゃな。…なかなか似合っとるぞい」
「ありがとうございます」
母さんに仕込まれた穏和な笑顔で答えると秀吉は僅かに頬を染めながら視線を前に逸らした。
朝の宣言通り今日の俺の髪型はツインテールである。頭の左右を赤い大きめのリボンで結んだだけのシンプルなものだが、わりと似合っていたのでこの髪型にしたわけだ。切るのがダメならせめて邪魔にならないようにしたいと思うのが僅かに残った男の尊厳というものだ
秀吉「ときに柏木よ」
「はい？」
秀吉「今日は島田と姫路とで弁当を用意する約束じゃったが、柏木は何を作って来たのかの？」

…ちょっとマテや。俺はやるとは言ってないのに決定事項なのか？！

「お弁当は用意してますが…」

対決するほどは…と言いかけるが秀吉は満面の笑みを浮かべる。いや、弁当は自分のぶんしかないのだが

秀吉「そうか！では昼休みが楽しみじゃのう♪」

嬉々とする秀吉には聞こえてないようだった…

続く

第１４話：味勝負！究極ＶＳ至高！…って、美〇しんぼかよっ！（前書き）

Ｅエブリスタで投稿している分の後半部分です。

第１４話：味勝負！究極ＶＳ至高！…って、美〇しんぼかよっ！

ほどなくして学園に到着。いったん秀吉と別れて下駄箱で上履きに履き替え、再び合流して教室に向かう

秀吉「おはよう、皆の衆」

「おはようございます」

秀吉が先んじて入り、それに続いて入る。全く参加しなかった俺が言うのもなんだが、Ｄクラスの設備が少しもったいないと思ってしまった

雄二「おう、秀吉に柏木。時間どおりだな」

秀吉「雄二は早かったようじゃの」

先に登校していた坂本が卓袱台前に胡座を書いている。その卓袱台には英語の教科書。どうやらテスト前の最終チェックしているようだな

？？「おはよー」

俺と秀吉が席についてからほどなくして吉井が到着。一瞬教室を眺めてから微妙な表情したのはたぶん俺と同じことを考えたのだろう

雄二「おう明久。お前は時間ギリギリだな」

明久「ん、おはよう雄二。…ところで皆には何も言われなかったの？」

雄二「ん？何がだ？」

明久「Ｄクラスの設備のこと」

…まあ、吉井の言いたいことは分かる。あれだけ苦労して勝利したのに何の見返りもなしだからだ

雄二「ああ。皆にもきちんと説明をしたからな。問題ない」

明久「ふーん」

よくもまあ聞いたものだ。まあ、坂本の戦略と士気向上でもっといい設備を狙えると踏んだのだろう

欲深い亡者どもが

生徒Ａ「…？」

生徒Ｂ「どうした？」

生徒Ａ「いや…何か悪寒が」

生徒Ｂ「お前もか？…実は俺もだ」

生徒Ｃ「実は俺も」

…俺の毒電波（？）を受けたせいかクラスメイトが口々に告げる

明久「みんな風邪ひいたのかな？嫌だねえ」

雄二「……」

吉井がとんちんかんなことを言うなか、坂本だけは何故か俺を睨んでいた。

いや、俺超能力者や呪術師じゃないし

雄二「…それよりお前はいいのか？」

明久「何が？」

雄二「昨日の後始末だ」

坂本が俺から視線を外し、再び吉井に話しかける。その様子を眺めながら秀吉とともに席についた

秀吉「柏木はチェックしなくて大丈夫なのかの？」

「私は昨日勉強したので大丈夫ですよ」

秀吉「柏木は優等生なんじゃの」

「そんなこと…普通ですよ」

秀吉の言葉に愛想笑いを浮かべる。毎日の習慣なのだから誉められてもくすぐったいだけだ…

？？「吉井っ！」

明久「ごぶぁっ！」
突然の咆哮と断末魔（？）に驚いて視線を向けると島田の鉄拳が吉井の顔面にクリーンヒットしていた

ホントに顔面ってへこむんだね

明久「し、島田さん、おはよう……」

美波「おはようじゃないわよっ！」

床に突っ伏しながらそれでも挨拶する吉井を見下ろしながら仁王立ちで一喝する島田。

あの位置からなら吉井には見えるんじゃないかな

なにとは言わないけど。
美波「アンタ、昨日はウチを見捨てただけじゃ飽き足らず、消火器のいたずらと窓を割った件の犯人に仕立てあげたわね……！」

……犯人に仕立てあげたのは思いっきり目撃していたが…そんなことまでしていたのか。そりゃ島田も怒るわな

美波「おかげで彼女にしたくない女子ランキングがあがっちゃったじゃない！」

……そんなものがあったのか。……俺も一応女子だから入ってるの

か？

…転校2日目だからそれはないか

秀吉「柏木は【彼女にしたい女子ランキング】が高そうじゃの」

「ふぇ？わ、私は昨日転校してきたばかりですからぃ」

普通はあり得ないだろ…

雄二「いや、そうでもないぞ？」

「え？」

雄二「ある筋の情報だと…そのランキングに柏木は5位だそうだ」

はあ！？まだ転校してから2日しか経ってないのに5位！？

秀吉「ふむ、流石は柏木じゃのう」

いや、あり得ないだろ…

康太「…最新情報…【彼女にしたい女子ランキング】…1位：姫路瑞希…2位：霧島翔子…3位：木ノ下秀吉…」

秀吉「ワシは女子じゃないと言うとろうが！」

…普通は分からないわな…

康太「…4位：柏木ユナ…5位：工藤愛子…ちなみに柏木が4位になる前が工藤愛子…」

俺が４位!?２日目でそれは早すぎだろ…

秀吉「ワシは柏木より上なのか…」

雄二「なんでもＤクラス戦後半で廊下の片隅に佇む姿を目撃してランクインしたそうだ」

康太「…最新情報での順位上昇は髪型のチェンジが原因……ツインテール萌え…」

なんてこった…無意識に自分から順位を上げていたとは…

康太「…ちなみに【妹にしたい女子ランキング】は柏木が１位…」

いや、そこまで聞いてないし…

【ガラッ!】

「?」

雄二「おい明久、どうした?」

唐突に吉井が物凄い勢いで教室を出ていった。坂本が声をかけるが聞こえなかったようだ

美波「～♪」

先ほど吉井を殴り倒した雰囲気とは一変して心底愉しそうな表情をして島田が席につく。なんだか気になったので席を立って島田の元

へ行ってみる

「おはようございます、美波」

美波「ん、おはようユナ…って、アンタって髪型変えるとイメージ変わるわね…」

「そうですか？」

島田はどこか呆れたような表情を向ける。いや、ただ邪魔くさいから分けただけなのだが。

「そういえば美波」

美波「なによ？」

「先ほど吉井君と話していたときは酷く不機嫌だったのに今は機嫌がいいですよね？どうしたんですか？」

美波「ああ、そのこと？昨日試召戦争中の放送聴いた？」

島田の問いかけに深く頷くとケラケラ可笑しそうに笑った

美波「今日の１時間目の数学のテストね監督の先生、船越先生なのよ」

…なるほどね

・　・　・

・　・　・

明久「うあー……づがれだー」

吉井が自分の机に突っ伏す。とりあえず４教科が滞りなく終了した。何を言ったか知らないがとりあえず船越先生の件は何とか解決したらしい

突っ伏している吉井にごく自然な動作で秀吉が近寄る。これも演劇の成果だろうか？

秀吉「うむ。疲れたのう」

近寄った秀吉を見て真っ赤になって視線を逸らす。まあ…今の秀吉は普通の女子よりは可愛いと思うからな…【彼女にしたい女子ランキング】３位は伊達じゃないということか

…男の娘だけど。

雄二「よし、昼飯食いに行くぞ！今日はラーメンとカツ丼と炒飯とカレーにすっかな」

勢いよく立ち上がる坂本…って、己はフードファイターかよ

美波「あのさ…そのことなんだけど」

島田がどこか言いづらそうにしながら卓袱台の下をゴソゴソして大きめの袋包みを取り出す。…ちなみにその際にムッツリーニが必死

にスカートの中をカメラで撮影しようとしていたが敢えてスルーしよう

俺がやられたら”オハナシ”させてもらうが。

雄二「それは…弁当か？」

美波「そうよ。昨日話したでしょ？瑞希も持ってきているみたいだし」

瑞希「え？あ、はいっ。持ってきています」

…そういえば吉井や島田のインパクトが強すぎて姫路が空気になってしまっていたな…

美波「ユナもあるでしょ？」

「一応作ってはきてますが…1人ぶ「というわけで勝負よ！瑞希！ユナ！」……はぁ…」

相変わらず人の話を全く聞かないやつだ。…ま、弁当は島田か姫路に分けてもらうとするか…

本当に勝負することになるとはな…

続く

第１５話：坂本は過大評価し過ぎだと思う…これも奴の手か？

雄二「ほう、弁当か。俺達も食わせてもらっていいのか？」

美波「構わないわよ」

瑞希「あの、沢山作って来たのでぜひっ」

「…いいですけど」

１人分しかなかったのだが。

秀吉「それではせっかくのご馳走じゃし、こんな教室ではなくて屋上でも行くかのう」

明久「そうだね」

…姫路や島田はともかく、俺は普通の自家製弁当なのだが。

雄二「そうか。それならお前らは先に行っててくれ」

明久「ん？雄二はどこか行くの？」

雄二「飲み物でも買ってくる。昨日頑張ってくれた礼も兼ねてな」

…皆はともかく、俺は何もしてないけどな

「あ、じゃあわたしも手伝いますよ。１人じゃ持つの大変でしょう

し」

ま、このくらいはな。

「じゃあ美波。すみませんが持っていって下さい」

美波「わかったわ…って、随分少ないわね」

「あはは…」

そりゃそうだ。1人分だったし。

雄二「…悪いな。それじゃ頼む」

「はい」

俺と島田の会話が終わるのを待っていたのか、話が終わると同時に声をかける。…意外と律儀だな

雄二「きちんと俺達の分をとっておけよ」

明久「大丈夫だってば。あまり遅いとわからないけどね」

雄二「そう遅くはならないはずだ。じゃ、行ってくる」

俺と坂本で教室を出る。行き先は一階の売店だ。ここは公立の高校と違って色々融通が効くから一口に売店と行っても品揃えが豊富だったりする。飲み物にしてもノンアルコールのシャンパンからどろり濃厚ジュースまで。

…需要あるのか？それ…

雄二「柏木」

「なんですか？坂本君」

雄二「…お前はDクラス戦は交戦していなかったようだが…」

これより先は言葉に出さず、視線で”何故だ？”という意志表示を示す。

「…手の内を見せすぎないほうがいいと思ったからですよ。わたしが出なくても作戦に支障はなかったでしょう？」

雄二「…まあ、そうだが。……なあ、柏木」

「なんですか？」

俺が自分の意見を述べるとほんの僅か考える仕草をしてから再び訊ねてくる。

雄二「お前…軍師をやらないか？」

「はい？」

軍師？軍師って某天下三分した歴史であった役職のアレ？

雄二「お前の洞察力は目をみはるものがある。加えて戦局を見定めるのも上手い。何より冷静だ。お前が軍師なら俺の策をより磐石な

物にできるはずだ」

「そんな…買いかぶりすぎですよ」

…なるべく目立ちたくないんだが…何故こうなった？ただ傍観者でいたはずなのに。

雄二「そんなはずはない。第一、Ｄクラス戦のこともすぐに理解したじゃないか」

普通に考えれば分かるはずなんだがな…

「はぁ…わかりました。わたしとてＡクラスの設備は欲しいですからね」

雄二「そうか。期待しているぞ？」

「幻滅しても知りませんよ？」

クスリとこれも母さん直伝のしたり顔を向けると坂本も試召戦争開戦宣言をした時のニヤリ笑いで返してきた

続く

第１５話：坂本は過大評価し過ぎだと思う…これも奴の手か？（後書き）

後半部分は既に完成してますので、ストックが出来次第投稿します

（＾－＾）

第１６話：彼女の弁当は殺人料理らしい。…説教しないとな…（前書き）

前回同様、Ｅエブリスタに投稿した部分の後半部です

第１６話：彼女の弁当は殺人料理らしい。…説教しないとな…

……なんじゃこりゃあ。

この小柄な体躯と購入したジュースを抱えて歩くといった動作のせいで（でも自分の胸に缶ジュース（３５０ｍｌ）が４缶も乗ったことには驚愕した。いや、マジで）坂本から遅れること数分。

屋上は阿鼻叫喚の地獄と化していた。昏倒して小刻みに震えるムッツリーニ、先ほど購入したジュースを辺りにバラ撒いてムッツリーニと同じように昏倒する坂本。顔が青ざめている吉井と秀吉。訳が解らないといった表情の姫路と島田。

…なんじゃこりゃあ…

大事なことなので二度言ってみた。

明久「ああ、お帰り柏木さん！雄二なら足が吊っただけだからっ！」

「はぁ」

ふむ…俺の弁当は未開封…まあ、俺が不在なのに勝手に開けるわけはないわな。他には…開封してはいるが手付かずの弁当に…食べかけの弁当…

「吉井君、この食べかけのは誰のですか？」

明久「え、あ、それは「私のです。ユナちゃんも良かったら食べて下さいね☆」……」

…なるほどね、何となく状況は理解した。

つまり、姫路の弁当が常軌を逸した味らしい。で、それを食べたムッツリーニと坂本が昏倒。ムッツリーニは解らないが、坂本は俺より先に戻っていたとはいえ、食べてからそんなには経っていないはず。

…結論として即効性のある毒物弁当とみた。

「瑞希ちゃん、味見はしましたか？」

瑞希「え？あの、味見をしていたら太っちゃいますから…」

恥ずかしそうに照れ笑いを浮かべる姫路。やっぱりね…

「あのですね…瑞希ちゃん、味見は味を調節したりする重要なファクターなんですよ？味を確かめないで人に食べてもらうなんて愚の骨頂です！美波は味見していますよね？」

美波「ええもちろん。味を見ないと砂糖や塩の分量を間違えて甘くなったりしょっぱくなったりするし」

明久「ちょ、ちょっと柏木さんっ」

「なんですか？」

これから姫路に料理とはなんぞやと講釈しようとした矢先に吉井に

制止されて皆から離れた場所に連れていかれる。

明久「（ひ、姫路さんには料理のことは黙っていてくれないと…彼女繊細だからショック受けると思うし…）」

吉井の答えに盛大にため息をつく。本当にバカだなこいつ…

「バカですか貴方は。…いいですか、吉井君。このままこの場を誤魔化すことは容易です。しかし」

明久「（今柏木さんからバカ呼ばわりされた気が…）しかし？」

「近い将来瑞希ちゃんが誰かと結婚して「それって誰と！？」聞けよボケ。」

…と。思わず素が出てしまった…失敗失敗。

軽く咳払いをして気持ちを落ち着かせる。ついつい料理のことで熱くなってしまったようだ

「…で、ですね…瑞希ちゃんが旦那さんに手料理を振る舞ったとしましょう。…今と変わらない腕前で料理したらどうなりますか？」

明久「そりゃあとんでもない大惨事に…あ。」

俺の指摘にハッとした表情になる。ようやく理解したか…

「その時になってようやく気づくでしょうね。”もしかして私の料理のせいで”と。そうなったら今理解するショックよりも計り知れないと思いませんか？」

明久「……確かに」

ようやく事の重大さに気付いたのか吉井も神妙な表情に変わる。

「ですから…わたしから話しますね」

吉井はまだ何か言いたげだったが言葉が見付からないようで、それ以上は何も言わなかった

「お待たせしました」

美波「…ユナ。アンタ吉井と何話していたの？」

「その話も含めてこれから話しますよ」

どこか不機嫌そうな表情をする島田を敢えてスルーしつつ姫路に視線を向ける

「瑞希ちゃん。瑞希ちゃんはどうやって料理をしていますか？」

瑞希「どう…って？」

姫路がきょとんと顔を傾ける

「ちょっと漠然としてしまいましたね。…そうですね、例えば瑞希ちゃんが作ったエビフライ…どうやって作りました？」

普通なら生海老を殻を剥いてパン粉と溶いた玉子を絡めて油で揚げるのが普通だが…（注：作者の個人的見解です）

瑞希「どうやってって…」

それから姫路は普通の料理ではあり得ない調理法を語る。…というか酢酸や塩酸を使う時点でおかしすぎる。なんだよ、”酸っぱくする場合は酢酸”って…料理を舐めてるのか？

「瑞希ちゃん」

瑞希「は、はい？」

「一度料理の上手な人に1から教えてもらって下さい。瑞希ちゃんは料理を科学実験なんかと勘違いしていませんか？そのくせ味を確認しないで人に食べさせるなんて…その人を殺す気ですか？」

瑞希「えと、あの…」

俺の言葉に僅かに震えながら目に涙を溜める。可哀想だが…ここではっきり言っておかないと彼女の将来的によくないからだ

「それと、美波が聞きたがっていた吉井君との話ですが…瑞希ちゃんのお弁当のことです」

美波「瑞希の弁当？」

「はい。先ほど土屋君と坂本君が倒れたのは何故だと思いますか？」

ここで敢えて姫路には振らず、島田に視線を向けて話しかける。

美波「そりゃあ…坂本は足が吊ったとかで…まさか…」

「そのまさかです。土屋君のはわたしは見ていませんでしたが、瑞希ちゃんのお弁当を食べてから倒れませんでしたか？」

美波「そういえば…」

なんとなく理解したのか顔を青ざめる

「加えて先ほど瑞希ちゃんからお聞きした調理法です。あれはほとんど科学実験で料理とは言えません。…美波もわかるでしょう？」

俺の問いかけに神妙な表情で頷く。

「調理法は科学実験、しかも味見はなし…とくれば瑞希ちゃんの弁当は食べ物ではないですよ。吉井君は彼女にそれを悟られないようにしようとしていたわけです。瑞希ちゃんがショックを受けないようにと」

瑞希「そんな…」

明久「あの、姫路さん…」

瑞希「っ！」

愕然とする姫路に吉井が声を掛けようとするが、そのまま走って屋上を出ていく。まあ…普通はショックだわな。…可哀想だが、彼女のためだ

秀吉「…柏木、いくらなんでも言いすぎなのでは…？」

「事実ですから」

そう言いつつ姫路の弁当のおかずの1つ、唐揚げを取って食べる

秀吉「っ！？な、何を！？」

「これは…最悪ですね。料理と呼べるものではありません」

かなり不味いなコレ。唐揚げでこのレベルなら、他も相当だろう…

普通なら卒倒ものだな

秀吉「…なんとも…ないのかの…？」

「わたしはこれ以上に危険な物を食べたことがありますから」

これに比べたら母さんの友人のジャムの方が何億倍も危険だ。昔一口食べてその日1日の記憶が消し飛んだのだから…あれは味すら感じる前に意識がなくなったが。

秀吉「す、すごいんじゃの…」

雄二「だが姫路はどうする気だ？あれはしばらく戦力にならんかもしれんぞ？」

「ふむ…」

確かに試召戦争どころではないだろうな。…となると…

「それでは二段作戦でいきましょうか。本来瑞希ちゃんが担うべき役はわたしがやります」

理由はともあれ、姫路を戦意喪失させたのは俺の責任だしな。

雄二「…ほう、二段作戦か。で、柏木はどう考えている？」

坂本がニヤリとイタズラを仕掛けるつもりのような悪餓鬼みたいな笑みを浮かべる

「まあ、焦らないで下さい。せっかくですから食事しながら話しましょう」

そう言いつつ危険な姫路の弁当を包み、俺の弁当を開ける。

美波「ねえ…瑞希のこと追わないでいいの？」

「それは吉井君にまかせましょう」

美波「え？アレ？吉井がいない？」

島田達は気付いていなかったが、姫路が走り去った後しばらくしてから追いかけていったのだ

「瑞希ちゃんのことは吉井君にまかせて、わたし達は作戦会議を開きましょう」

まあ…ほとんどは坂本の作戦にちょい足しするだけだがな。

続く

第１６話：彼女の弁当は殺人料理らしい。…説教しないとな…（後書き）

次回からは1週間ごとのスパンで投稿していきたいとおもいます。
そのほうがスムーズにストックも貯められますし、加筆や修正もチェックしやすいので。

読者様には申し訳ありませんが、ご了承下さいませぃ

第17話：Bクラス戦開戦準備。…傍観者だった頃が懐かしい…（前書き）

時間で投稿するのを忘れてましたぃ

第17話：Bクラス戦開戦準備。…傍観者だった頃が懐かしい…

雄二「…で、二段作戦と言ったか。柏木はどうするつもりだ？」

坂本が俺の弁当をパクつきながら訊ねる。1人分しかないんだから大食いのお前があんまり食うな

「…そんな大それたものではないですよ。坂本君の作戦にちょちょっと上乗せするだけです」

俺の言葉に目を細める坂本。あのガタイだからわりと凄みがあるな

雄二「ほう…俺の作戦がわかるのか？」

「少し考えればわかりますよ。まず最初ですが…Dクラスと戦ったのは士気を高めるだけではなく…布石を作るために貸しを作っておく必要があった」

右手人差し指を上に立てながらすっかり慣れてきてしまったロリボイスで説明する

雄二「…というと？」

「坂本君。次の相手はBクラスでしょう？」

俺の問いかけに再び目を細める。

美波「どういうことよ？ウチらの目標はAクラスでしょう？なんで次戦がBクラスなのよ」

雄二「確かにそうだが…何故そう思う？」

坂本が俺の問いかけに疑問で返す。これも軍師としての仕事なのか…

「そのためのDクラス戦ですよ。これはわたしの推測ですが…Bクラス戦も長期戦で決着をつけると思います」

俺の言葉に坂本が次を促すように目で見据える

「…それで、クラス総勢で敵本陣…Bクラス教室に大挙して押し寄せて混戦模様にします。そのくらいのタイミングで指示を出してDクラスの敷地に間借りしているエアコンの装置を動かなくします。…となるとただでさえ出入口が混雑して空気が悪いのにエアコンが動かないとなると少しでも換気を良くするために窓を開けますよね。Bクラスの根本は悪名が高いらしいですので自分だけ涼をとろうと窓際に移動するはず…そこが作戦のキモですね」

ふぅ…と一息ついてから烏龍茶を飲む。…なにげに女性化してからこんなに喋ったのは初めてかもしれない

雄二「…正解だ」

「ふぇ？」

雄二「委細は違うがほぼ俺が考えていた作戦と同じだ。……本当にお前を軍師にして正解だったな」

坂本がやられたといわんばかりの表情をしながら後頭部に手を当てる。…これも布石を見ればわかることなんだが。

美波「え、ユナって軍師だったの？」

「先ほど就任したばかりですよ」

島田の呆気にとられた表情に愛想笑いを浮かべつつ、島田の弁当の厚焼き玉子を１つほおばる。うまうま。

美波「あ、それ自信作なのよね。…どう？」

島田製の厚焼き玉子を咀嚼しているとどこか緊張した面もちで訊ねる。…先ほどの姫路への説教のせいか？

「…なかなか美味しいですよ。…ただもう少し薄味にしてもいいかもしれません…ま、そこは個人的な意見ですけどね」

ゆっくり咀嚼して飲み込んでから感想を述べる。まあ…普通には美味しいが、辛口意見としたらね

美波「なるほど、薄味ね」

雄二「…料理談義も結構だが、作戦の続きはどうした？」

「あとは話さなくてもいいのではありませんか？…誰が聞いているとも限りませんし」

坂本の先を促す言葉に真顔になりながら返すと釈然としない表情をする

「はぁ…わたしが二段作戦だと言ったのは、正面切って正々堂々と来る戦力と窓からの奇襲戦力…それに吉井君にしか出来ない奇襲で

す」

美波「吉井？」

雄二「明久を使うのか？いったいどうやって…」

「それはあとのお楽しみ、です」

２人同時の疑問に軽くウインクしながら答える。視界の端で秀吉が赤面したが恐らく気のせいだろう

美波「それで…さっきも聞いたけど、どうしてＢクラスなの？」

雄二「正直に言おう。…どんな作戦でも、うちの戦力じゃＡクラスには勝てやしない」

…実際は出来なくはないがな。だが確率的に分が悪すぎる…坂本は気がついていないみたいだから黙っておこう

美波「それじゃ、ウチらの最終目標はＢクラスに変更ってこと？」

欲を言わなければＢクラスの設備も立派なんだがな…だが、坂本はそのつもりはないだろう

雄二「いいや、そんなことはない。Ａクラスをやる」

美波「じゃあどうするのよ？」

雄二「クラス単位では勝てないと思う。だから一騎討ちに持ち込むつもりだ」

……なるほど、そのためのBクラス戦か。坂本も考えたな

秀吉「柏木は雄二の意図が分かったのかの？」

秀吉が俺の弁当をパクつきながら訊ねる。…だから1人分しか…ってもうほとんどないし…

秀吉「柏木の弁当、なかなか美味じゃったぞ。料理上手いんじゃな」

「いえいえ、ほとんど簡単に出来るものばかりですよ」

秀吉の感想に愛想笑いを浮かべる。時間なかったからほとんど出来合いのものばかりなんだが…

「あと、坂本君の話していることですが…だいたい分かりました」

俺の発言に眉をひそめ、視線を島田から俺に向けてくる

雄二「…ほう。本当に柏木は理解が早くて助かるな。…で？俺はどうしようとしていると思う？」

「それも言うんですか…？」

坂本の言葉にあからさまに嫌な表情を作る

雄二「分かったんだろう？…話してみろよ」

なんだか不機嫌になってないか？

「……はぁ、分かりました。長くなりますのである程度はしょりますよ？」

雄二「構わんぞ」

偉そうだな、オイ。

「まずは一騎討ちする材料にBクラスを使います。Bクラスには、わたし達…Fクラスに負けた時に設備を入れ替えない代わりにAクラスに攻め込むように交渉するんです。試召戦争のシステム上、下位であるFクラスに負ければ一気に設備が最低のFクラスですが、上位であるAクラスが相手ならCクラスランクの設備ダウンで済みますから…どちらが相手にリスクが少ないか分かりますよね？」

坂本はムムッ…と言わんばかりの表情をしている。自分の考えを見透かされたのが気に入らないのだろう。…島田と秀吉はまだ意図が分からないようだ。…まあしょうがないか

秀吉「それで…どうなるんじゃ？」

「それをAクラスの交渉材料とします。『Bクラスとの勝負直後に攻め込むぞ』といった具合に」

美波「なるほどねえ」

秀吉「じゃが、それでも問題はあるじゃろう？体力としては辛いし面倒じゃが、Aクラスとしては一騎討ちよりも試召戦争の方が確実であるのは確かじゃからな。それに…」

「それに？」

なんとなく秀吉の言っていることは分かったが敢えて聞き返してみる。

秀吉「そもそも一騎討ちで勝てるのじゃろうか？こちらに姫路がいるということは既に知れ渡っていることじゃろう？」

確かに…そこが腑に落ちない点ではある。たとえ一騎討ちに持ち込めたとしても、相手は学年主席だ。成績はハンパないはず…姫路でも勝てる可能性は低い。ましてや坂本はいうに及ばず、俺はもちろんのこと…クラスの誰が出ても同じだろう。

雄二「どうした？柏木。お前でも読みきれないか？」

坂本がニヤニヤしながら見る。…ムカつく野郎め

「これより先はデータにはない不確定要素ですので。普通に考えてもわかりませんよ」

俺の言葉に「まあ、そうだろうな」と悟ったような表情をする。読まれたことをよっぽど根に持っているのか？

雄二「…まあ、大丈夫だ。そのへんに関しては考えがある。心配するな」

なぜか自信満々な坂本。…俺の知らない要素があるみたいだな。橘に聞いてみるか…

雄二「とにかくBクラスをやるぞ。細かいことはその後に教えてやる。…で、柏木」

「なんですか？」

雄二「明久に宣戦布告の使者をやるように伝えて来てくれ」

坂本が相変わらずの偉そうな態度で指示する

「吉井君をですか？彼はＤクラスの宣戦布告で酷い目に会っているから拒否すると思いますが」

雄二「その辺りはどうするかはお前にまかせる。じゃあ頼んだぞ」

そう言ってから立ち上がって屋上を出ていく。おそらく島田と俺の弁当だけでは足りなかったのだろう

……結局俺はほとんど自分の弁当が食えず、泣く泣く姫路の毒物弁当を完食したのだった

…ウップ、さすがに気持ち悪い…

続く

第１８話：なんだか約束が増えてきてるような…

秀吉「柏木、大丈夫なのかの…？姫路の弁当を完食してしまって…」

「大丈夫ですよ。先ほども言いましたが、これ以上の物を食べたことがありますから」

秀吉「それでよく生きていたのう…」

秀吉が哀愁に満ちた眼差しを向けてくる。…正直アレを味わったら即死する劇薬以外はどうってことはない。

美波「う～ん、とりあえず今回はユナの勝ちね。瑞希のはともかくとして、ユナのお弁当凄く美味しいし…負けたと思ったわ」

秀吉「うむ。島田のもなかなか美味じゃったが、柏木のほうが美味しかったのう」

「ただの出来合いですよ」

２人の称賛にひたすら苦笑いを浮かべる。大したことはしてないんだがなあ…

「さてと…」

すっかり食べ終わっている弁当殻を片付けて手に持ち、ゆっくり立ち上がる。その際に軽くスカートの裾の埃を払うのを忘れない…これも偉大なるお母様の教育の賜物だ

秀吉「ん、もう行くのかの？」

「はい、早く吉井君を探して伝えなくてはいけませんから。…ですが正直どう説得したらいいか困ってますけどね」

秀吉の問いかけに苦笑いを浮かべてから屋上を出る。さて、どう説得しようか…

明久「え、僕がBクラス戦の使者？」

「はい。坂本君がそう言ってました」

屋上を出て探索すること数分。幸いにもすぐに吉井を発見したので次の試召戦争の相手とその相手側への使者に吉井が任命されたことを話す。

当然吉井は嫌な顔をしていた。…まあ、仕方ないか…で、傍らに姫路が居たが落ち込んでいる様子は見られない。どうやら慰めるのに成功したようだな

「…やっぱり嫌ですよね。どうしましょう…」

明久「…いや、別に嫌とは言ってないけど」

「え？」

嘘つけ。話した直後心底嫌そうな顔してたくせに

明久「でも条件があるよ」

「条件？」

なんだ？吉井のことだから自分の為ではないと思うが…

明久「柏木さんが姫路さんに料理を教えてくれるなら喜んで使者をやるよ」

「……はい？」

は？俺が姫路に料理？何故にそうなる？

明久「ムッツリーニから聞いたよ、柏木さん…姫路さんのお弁当完食したんだよね？」

アイツ…いないと思ったらいつの間に。

明久「（ムッツリーニにはともかく、雄二も一口で倒れたのに…平気だったの？）」

吉井が姫路に聞こえないように小声で問いかけてくる。まあ…普通なら無事じゃ済まないわな

「（ええ。…アレに比べたら物凄く美味しくないお弁当なだけですから）」

明久「（アレって？）」

「（まあ、こちらの話です。あまり気にしないで下さい）」

明久「（そ、そう…）」

吉井に合わせて俺も姫路に聞こえない程度の声で答える。何気なく姫路を横目で見るとどこか緊張した面もちで様子を伺っている。

たぶん説得の課程で俺に料理を教えてもらえるようにお願いしてあげるだとかいったのだろう。まったく、人に教えられるほど上手くないというのに…

「はぁ…わかりました。わたしでよければ」

明久「ホントに！？ありがとう！」

吉井が満面の笑みを浮かべ、近くでまだ緊張した面もちでいた姫路にサムズアップしてみせる。直後に涙を浮かべながらこちらも満面の笑顔になった

瑞希「ユナちゃんありがとうございます！私頑張りますね♪」

「わたしも人並みにしか出来ませんが…まあ、普通に食べられるくらいまではレクチャーしますよ」

心底喜んだ姫路が俺の両手を包み込むように握りしめて上下にブンブンと振る

酔うからヤメロ。

明久「じゃあ僕は宣戦布告をしてくるよ。じゃあね」

瑞希「吉井君、ありがとうございましたっ♪」

明久「頑張ってね、姫路さん」

瑞希「はい！♪」

それから吉井は嬉しげに何度もお辞儀する姫路に爽やかな笑みを向けてから走り去っていった

・・・・

唯子「坂本雄二の情報？そんなの調べるまでもなく掴んでるけど？」

「え、マジで？」

あれから姫路と分かれ（料理のレクチャーは試召戦争終結後に決まった。正直めんどい…）以前と同じくEクラスに赴くとこれまた以前と同じく”情報屋ヴァイス”こと、橘唯子が待ち構えていた。再び新聞部部室に訪れて先ほどから気になっていた坂本雄二の情報を入手すべく唯子に訊ねるとそう切り出してきた

唯子「私を誰だと思ってるのよ。個人のプライベートな情報くらい朝飯前よ」

それヤバくないか？

唯子「…で、何を聞きたいの？スリーサイズ？」

男のを聞いても嬉しかないわ！

「…坂本雄二とAクラス代表の霧島翔子との関係を聞きたい。報酬は…どうするか…」

唯子「それなら報酬はもらうほどでもないわ。前回の報酬…貴女の身体情報だけでこと足りるもの」

俺の情報ってそんなに重要なのか…

唯子「2人は幼馴染み同士よ」

「は？」

いきなりの情報開示なので思わず間の抜けた声をあげてしまった

唯子「あらまあ、美幼女にはあるまじき声ね。」

「誰が美幼女だ、誰が」

唯子「あら、私は幼女と呼ばれるほど幼くは見えないはずだけど？」

「お前な…」

ジト目を向けるとふふん、とどこか偉そうにしながら瓶底メガネを外して切れ長な瞳を向ける

へえ…コイツも”メガネを外せば美形”のお約束な人間か。

まあ、どうでもいいが。

唯子「…私の美貌に見惚れてるの？ダメよ、同性には興味ないから」

「ちげぇよ、話を逸らすな。坂本と霧島が幼馴染みって本当か？」

からかう橘に再びジト目で睨むと憮然とした表情になって腕を組む。

…コイツも腕を胸の下で組むんだな

唯子「私の情報に嘘があると？」

「そんなことはいってねえ。…他には？」

唯子「…ここから先は別報酬よ。貴女なら今の情報で推理できるはずでしょ、”軍師”さん☆」

橘が切れ長の瞳をさらに細めてわざと軍師を強調していいのける。

コイツ…さっきの坂本との話も掴んでいたか

「お前いつの間にそんなことまで…」

唯子「あれだけ人がいる中で聞かれてないと思ってたの？」

再び鼻で笑い瓶底メガネをかける。憎たらしいなコイツ

「…わかった、その辺の話ももういい。で、Bクラス戦の情報も別報酬か？」

唯子「それは先日の報酬で事足りるわ」

…なんだそりゃ。コイツの報酬基準がわからん。

それから橘は立ち上がり、前回と同じく生徒会室にありそうな棚からファイルケースを取り出してパラパラと目を通しながらめくったあとに数枚を取り出して俺が座る椅子の前の机に置いた。

ざっと見たところ一枚目の紙の一番上に”根本恭二”と書いていたから間違いないだろう

唯子「ご要望のBクラスの昨日までの成績表よ。…ああ、あと貴女の情報のはまだ準備が出来てないから…試召戦争後でどう？」

橘が棚から出してきた茶封筒に紙を入れながら訊ねる。俺が二つ返事で頷くと「よろしい♪」と満足げに微笑んだ

……さて、あとは坂本と情報の打ち合わせと作戦の準備か。前回と違って忙しくなりそうだ

…やれやれ、俺は傍観者でいたかったのにな…

続く

第１９話：Ｂクラス戦開幕。まずは…？

あれから翌日。一昨日よりは特に何もなく終わり、穏やかな朝となった。…相変わらず愚弟は俺と顔を合わせなかったが、嫌悪しているわけではないと雰囲気で感じたので敢えてスルーし、昼飯の弁当を用意する。

昨日よりは時間があるので手の込んだおかずが用意出来そうだなと思いつつ、揚げ物を揚げる油を用意する。

それから手早く味噌汁を作る。ちなみに具材はワカメと豆腐、薄く切った長ネギといったごく普通のものだ。出汁を煮干しでとり、赤味噌と白味噌をブレンドしたものを加える。

そうしてできた味噌汁を長めの水筒に入れる。それから味噌汁を煮込むのと同時進行でコロッケを揚げる。こちらは昨夜のうちにタネを下ごしらえしていたのを揚げるだけ。

「ん、よし…と。」

今日のおかずはコロッケにウインナー、だし巻き玉子に野沢菜漬け、煮豆など…と今回はレパートリーが豊富になった。

「うん、これで坂本達に食われても問題ないな」

我ながら満足のいくのが出来上がった、うん。

…はて、何かが失っている気がするが何故だろう？…ま、いいか。

そうしてから弁当をグリーンの布で包む。それからは朝食を済ませて家を出る。

途中で何故か秀吉と鉢合わせし、ともに登校。意外と饒舌な秀吉に苦笑いしつつ教室へ。午前中までは補充テストらしい…さて、今回は俺も出なくてはいけないらしいし、頑張るか。

・・・・・

雄二「さて皆、総合科目テストご苦労だった」

教壇に立った坂本が机に手を置いて皆の方を向いている。

ちなみに昼飯は大好評だった。島田は驚愕し、姫路は俺から必死にレシピをメモしていた。…一番驚いたのは秀吉が坂本と争うようにして食べていた…ちなみに吉井は一口も食べられず、島田の弁当を食べさせてもらっていた。

ぐちぐち文句を呟く吉井に島田は鉄拳をくれていたが…なんだかんだで嬉しそうだった。

このツンデレめ

俺自身も弁当にありつけず、秀吉の手作りらしい弁当をもらった。味はまあまあ、島田と同じくらいだった

まあ、それはさておき…今は昼食を終えてクラス全員が集結している。

理由は言わずもがな、いよいよBクラス戦が開戦だからだ。

雄二「午後はBクラスとの試召戦争に突入する予定だが、殺る気は充分か？」

『おおーっ！』

未だに下がらないモチベーション。それを維持するように尽力する坂本もさすがだが、クラスの連中も大したものだ。うちのクラスが唯一勝っている点だと思う。

雄二「今回の戦闘は敵を教室に押し込むことが重要になる。その為、開戦直後の渡り廊下戦は絶対に負けるわけにはいかない」

『おおーっ！』

雄二「そこで、前線部隊は姫路瑞希と柏木ユナに指揮を取ってもらう。2人とも、上手く連携とれよ。ついでに野郎共、きっちり死んで来い！」

瑞希「が、頑張ります」

「よろしくお願いします」

姫路は男のテンションについていけないのか若干引き気味な雰囲気を出しつつ一歩前に出る。

対する俺は色々と偉大なるお母様に仕込まれているのですまし顔で姫路と並ぶ。

『うおおーっ！』

俺はともかく姫路と一緒に戦えるとあって、前線部隊の士気は最高潮に達しようとしていた。

何はともあれ廊下での戦闘でアドバンテージをとらないことには作戦も何もあったものじゃない。それ故に戦力もＦクラス５１人中４１人を注ぎ込む。

そこには我がクラス最強かつ校内でも二位という強さを誇る姫路がいる。その点で言っても重要性はわかることだろう。

…って、誰に説明してるんだ、俺は…

キーンコーンカーンコーン

昼休み終了のベルが鳴り響く。いよいよＢクラス戦開始だ。

雄二「よし、行ってこい！目指すはシステムデスクだ！」

『サー、イエッサー！』

システムデスクって…それって暗にＢクラス戦で見返りなしって言っているようなものだよな…ちなみに上官が女性の場合、”サー”ではなく”マム”なのだそうだ。

…まあ、どうでもいいが。

そんなことを思いつつ俺達は全力でＢクラスへと向かう廊下を駆け出す。

唯子から仕入れたデータで坂本と検討した結果、Ｂクラスは比較的文系が多いのが分かった。なのでこちらの主武器は数学を選択。理由としては島田が数学を最も得意とし、その実力もＢクラスにひけをとらないそうだ。

…その代わり現国などの文系は壊滅的らしいが。

クラスメイトＡ「いたぞ、Ｂクラスだ！」

クラスメイトＢ「高橋先生を連れているぞ！」

向こうからゆっくりとした足取りでＢクラスのメンバーが歩いてくる姿が見える。人数は１０人ほど。あちらは急ぐ必要はないのだからこちらの出方を見るべく様子見といったところだろう。狡猾な根本のことだ、何か企んでいるだろうが…

生徒Ａ「生かして帰すなーっ！」

物騒な台詞を皮切りにＢクラス戦が始まった。

生かして帰すなって…戦死は西村先生の補習室送りになるだけだろうが。

…それもある意味地獄なのか。

続く

第２０話：根本は外道だとだけ言っておこう。（前書き）

書き上がるのが遅れましたｍ（　）ｍ

第２０話：根本は外道だとだけ言っておこう。

俺と姫路が到達した時にはすでに戦力は激減していた。体力バカなクラスメイトと違って姫路は運動が苦手らしく、俺は小柄故に歩幅が小さいのでついて行けなかったのだ。

瑞希「お、遅れ、まし、た……。ごめ、んな、さい……」

「皆さん、早すぎ、ですよ…」

姫路ほどではないが、俺も息を切らす。以前ならこれくらいなら平気だったはずだが…女性化の影響はこんなところにもでていたのだろうか。

生徒Ｂ「来たぞ！姫路瑞希だ！」

Ｂクラスの誰かが叫ぶ。こちらのことを調査していたのだろう。となれば未知数ではあるが俺のことも知られているはず…どちらにしても傍観者ではいられなかったってことか。

明久「姫路さん、来たばかりで悪いんだけど……」

瑞希「は、はい。行って、きます」

「瑞希ちゃん、わたしも手伝います」

瑞希「ありがとうございます、ユナちゃん。でも今は戦力を温存しないといけませんし、ここは私１人で大丈夫ですから」

俺の申し出をやんわりと断り、トタトタと戦場に紛れ込む。…まあ、姫路の言い分も尤(もっと)もだが、いくら姫路でも複数はキツいのではないのだろうか？

女子生徒Ａ「長谷川先生、Ｂクラス岩下律子です。Ｆクラス姫路瑞希さんに数学勝負を申し込みます！」

瑞希「あ、長谷川先生。姫路瑞希です。よろしくお願いします」

いきなり勝負を挑まれる。相手も姫路が主力だと気付いているのだろう。俺が相手側でも姫路は早めに潰しておきたいと思うし

女子生徒Ｂ「律子、私も手伝う！」

その後ろから、さらにもう一人Ｂクラスの女子が加勢する。まあ、姫路相手なら複数じゃないと敵わないと思ったのだろう

『試獣(サモン)召喚！』

喚声に応えて魔法陣が展開。それぞれの召喚獣が姿を表す…って、あのときは一瞬だったから姫路の召喚獣をちゃんと見るのは初めてだな。

敵の２体は剣と槍を構え、姫路は召喚獣の背丈と同じくらいの大剣を軽々と持っている。見た目は３人をそのままデフォルメしたような感じだ。

明久「あれ？姫路さんの召喚獣ってアクセサリーなんてしてるんだね？」

瑞希「あ、はい。数学は結構解けたので……」

……なるほど、あれなら”２人相手でも”勝てるな。

律子「そ、それって！？」

女子生徒Ｂ「私たちで勝てるわけないじゃない！」

吉井もようやく気付いたのか納得したような表情をする。…まあ、吉井には縁のないことだしな。忘れてて当然か

瑞希「じゃ、いきますね」

姫路が手をキュッと握り込む。その動きに合わせて召喚獣が左腕を敵の方に向けた

決まったな。

律子「ちょっと待ってよ！？」

女子生徒Ｂ「律子！とにかく避けないと！」

大げさなくらい横に跳ぶ敵２人の召喚獣。その直後に姫路の召喚獣の腕輪が光を発した。

キュボッ！

律子「きゃあぁぁーっ！」

女子生徒Ｂ「り、律子！」

左腕から光線がほとばしったかと思った瞬間、逃げ遅れた敵の召喚獣の一体が炎に包まれる。

【Ｆクラス　姫路瑞希　ＶＳ　Ｂクラス　岩下律子＆菊入真由美
４１２点　ＶＳ　１８９点　＆　１５１点】

腕輪を所持している場合、その召喚獣は特殊能力を有する。姫路の召喚獣の場合はレーザーというか、熱線を発するようだ。

俺の召喚獣は何を有しているのだろうか？そう言えば女性化してから召喚獣を一度も出してない気がする

瑞希「ご、ごめんなさい。これも勝負ですのでっ」

ぎりぎり逃げ延びたもう一体の召喚獣も姫路の召喚獣の大剣に武器ごと両断されて一気に決着がついた。

生徒Ａ「い、岩下と菊入が戦死したぞ！」

生徒Ｂ「なっ！そんな馬鹿な！？」

生徒Ｃ「姫路瑞希、噂以上に危険な相手だ！」

Ｂクラスの連中に驚愕の表情が浮かぶ。まさに姫路無双だ。

瑞希「み、皆さん、頑張って下さい！」

クラスメイトＡ「やったるでぇーっ！」

クラスメイトB「姫路さんサイコーッ！」

姫路の指示にFクラスの面々が俄然奮起する。

明久「姫路さん、柏木さん、とりあえず下がって」

瑞希「あ、はい」

「わかりました」

吉井の指示で俺と姫路は後方に下がる。…というか、腕輪の能力を使って消耗した姫路は分かるが、俺はなにもしてないんだが。

とりあえず温存しておこうということだろうか。

…いつまで”秘密兵器”でいればいいんだろう…

生徒A「中堅部隊と入れ替わりながら後退！戦死だけはするな！」

……ふむ、あまりに狙い通りにいきすぎる気がする…相手の代表はあの根本だ。わざと抑えているのかもしれないな

「あの…吉井く「明久、ワシらは教室に戻るぞ」……」

明久「ん？なんで？」

俺が撤退を進言しようとした直後に秀吉が割り込むように言いながらやってきた。こういうのは俺の仕事のはずなんだが…

秀吉が吉井にBクラスの代表は根本だと告げる。どうやら吉井は知らなかったらしい…というか吉井、お前は宣戦布告の使者で根本に会ってないのか？

明久「なるほど。戻っておいたほうが良さそうだね」

秀吉「雄二に何かがあるとは思えんが、念の為にの」

「わたしも一旦戻ります。坂本君と今後の作戦の検討する必要がありそうですので」

俺の言葉に2人は頷き、前線を維持するために姫路には残ってもらうように告げてから俺と吉井、秀吉は教室へと引き返した。

……なんだか嫌な予感がするんだよな。…気のせいだといいんだが…

明久「……うわ、こりゃ酷い」

秀吉「まさかこうくるとはのう」

明久「卑怯、だね」

教室に引き返した俺達を迎えたのは穴だらけになった卓袱台とヘシ折られたシャープや消しゴムだった。

やってくれるじゃねえか、根本のヤロウ…

明久「…なんか、柏木さんが怒ってるような…」

「わたしはこういう小細工が大嫌いなんです。…これはしかるべき

報復が必要ですね」

さて、どうしてくれようか。俺はヘシ折れたお気に入りのシャーペンを無表情で眺めながら根本へのオハナシをどうしようか考えていた。

明久「……秀吉…柏木さんは絶対に怒らせないようにしないといけないね…」

秀吉「……そうじゃな…」

続く

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n9141p/

ロリとテストと召喚獣

2011年12月4日00時52分発行